

澄懷堂書畫目錄

卷四

728.2
Y363t
5





澄懷堂書畫目錄卷四

二峯 山本悌二郎纂

王穉登答張相君詩立軸

高六尺一寸 闊一尺五寸三分 全絹 本画日さるるに、種も亦
草書。七言律一首。詩に曰はく

相國殷勤結義情。題詩遠寄闔閭城。栽松盡說龍鱗老。煉藥遙知鶴骨輕。

瀑挂風前吹不斷。雲來石上掃還生。長安近事何須問。滄海桑田幾變更。

〔答豫章張相君見寄、王穉登〕と款識し、王印穉登、廣長庵主の二印を鈐せり。

王穉登の書は文衡山の遺鉢を傳へ、參するに李北海歐陽詢を以てし、黃姬水、周天球に比すれば、稍峭勁を加へたり。此の軸、縑素微く黯澹たれども、墨色古厚なること漆の如し。詩亦靈活、傳誦するに足る。



80485

王穉登薊門雜詩卷

高九寸八分

長十六尺強

紙本

草書。五言律詩七首。七言律詩七首。計十四首を録し、末尾に「薊門雜首、敬上王屋觀察先生竄削、甲子十月朔日、勾漏山人王穉登書」と款識し王印穉登、尊生居士の二印を鈐せり。年譜を案ずるに穉登は、嘉靖十一二年の間に生まれ、萬曆四十年壬子、約八十歳を以て歿せり。之を以て推せば、此の卷を作れる甲子は約二十歳に當れり。年壯氣鋭、力めて文祝の長處を取りて之を筆端に鎔鑄せり。晩年の書の欹側瘦硬なることは、全く其の面目を異にせり。詩も亦清麗誦すべし。今その六首を録す。

夜歸二首

對酒不能去。歸時玉漏稀。星辰垂馬首。河漢上人衣。彈鋏功名苦。吹竽意氣微。

見君如海鳥。終日可忘機。

青槐樹樹煙。客舍苑牆邊。羸馬飲秋雨。短衣行暮天。梧桐思故國。蟋蟀感流年。

何事長相見。歸來又惘然。

袁相公召試餅中紫牡丹詩

名花開近掖垣邊。一朵風吹浥露鮮。色借相君衣上紫。香分太極殿中煙。

杯含仙豔春爲酒。翰染天葩錦作篇。何幸書生叩共賞。不材深愧沐恩偏。

送許參軍出塞

長城上谷近居庸。吹角鳴笳日禦戎。詔散黃金過塞北。身持寶劍入雲中。

三軍戰罷無秋草。七月邊寒有朔風。歸去尙書問麾下。偏裨若箇是英雄。

奉謝存翁相公問病

形骸土木佛燈前。黃客情深有夢牽。喘似吳牛初見月。瘦如遼鶴不冲天。

吟魂半憾參禪觀。酒債多逋費藥錢。知己未酬徒骨立。十年孤負佩龍泉。

靜志居詩話に云はく「伯毅の詩は亦華整なれども、第肉、骨よりも勝れるを嫌ふ。袁文榮の賞する所の色借相公袍上紫。書生薄命原同妾等の句に至りては、媚寵の詞、卑田乞兒の語に近し」。便ち卷中の袁相公召試餅中紫牡丹詩を指して言へるならむ。然れどもこれ酷論なり。百穀の詩、必ずしも風骨を具へざるにあらざるは、此の數首を讀みても之を知るに難からざるなり。

趙宦光書七言絕句立軸

高五尺三寸九分 闊一尺五寸六分 綾本

草書の意を以て篆書を作る。即ちこれ草篆なり。明代に能くせしは、前に趙宦光あり。後に傅山ありき。此の軸は草篆を以て七絶一首を書せり。曰はく

五月溪涼草閣深。遠山重出畫陰。柳條拂墜綠如雨。無數菰蒲長碧潯。

承句に一字を脱せり。款に云はく「趙宦光爲君思詞兄書」云、鈐印無し、朱玖珊の藏印あり。

申時行書五言古詩立軸

高六尺五分 闊一尺九寸八分 絹本

行草書五古一首。詩に曰はく

蟻棹循湖汶。携筇到玉泉。何年靈洞闢。此地勝遊偏。雷動幽岷坼。雲封仄徑穿。

一丘涵色界。萬象隱壺天。宛轉金庭闕。晶熒玉乳懸。材疑藏兔窟。神豈蟄龍淵。

柯爛曾看局。芝存舊布田。石床眠濕霧。丹竈宿雲煙。有關虛生白。無垠響入玄。

側身猶躑躅。觸目揔便娟。穴處堪忘世。嶺樓好學仙。異人冲舉後。誰與授眞詮。

「萬曆甲午九月既望、偕沈允登遊張公洞作、時行」云款識し、崇綸堂、瑤泉、大學士印の三印を鈐せり。申時行は臺閣の名相にして、文苑の人に非ず。然も詩書俱に之を善くし。專家をして後に瞠若たらしむるものあり。馮元成その詩を評して云はく「申公が有韻の文は口に對して立ごころに就り。叫囂亢厲の音、卑弱浮靡の調を爲さず。古體は建安に淵源し、近體は初唐に沈浸し、摹擬を事とせずして自ら合せざるなし」と、但其の詩書の流傳せるは、殊に尠きを憾む。

焦竑書七言律詩立軸

高四尺九寸 闊一尺七寸 綾本

行書四行。詩に曰はく

三楊當戶此開樽。雅況女君可易論。結客才應無上駟。談經名已動中原。

白移山帶芸生潤。綠滿書帷草漸繁。十載賦成還自愧。未堪重過子雲門。

「澹園老人竑書贈四愚先生」云款識し澹園居士、太史氏の二印を鈐せり。澹園は嘉靖萬曆間の

儒林の大宗なり。今其の墨蹟を見るに、敦樸堅勁にして一點の銜氣なし、淳儒の面目筆端に躍如たり。澹園は自ら翰墨を事せざりしが、門下には高材輩出せり。李仁卿が澹園に贈れる詩に「文章南國多門下。翰墨西國集上才」の句あり、蓋し實録なり。

許光祚書柳州讀書詩立軸

高四尺八寸六分

闊一尺六寸三分

絹本

楷行書。五言排律一首。詩に曰はく

幽沈謝世事。俛然窺唐虞。上下觀古今。起伏千萬途。遇欣或自咲。感戚亦以吁。

縹帙各舒散。前後互相逾。瘴疴擾靈府。日與往昔殊。臨文已了徹。奏卷兀若無。

竟夕誰與言。但與竹素俱。倦極更倒臥。熟寐乃一蘇。欠伸展支體。吟咏心自愉。

得意適其適。非愿爲世儒。道盡即閉口。蕭散捐囚拘。巧者爲我拙。智者爲我愚。

書史足自悅。安用勤與劬。貴爾六尺軀。勿爲名所驅。

河東先生讀書詩爲靜丸丈書

許光祚

下に許靈長、許光祚の二印を鈐せり。

靈長は隆慶萬曆の間。書を以て同郡の湯煥と湯許の稱あり。湯煥は字を堯文、號を鄰初と云ひ、楷書は虞世南を學び、行書は趙子昂、草書は懷素を習へり。時人之を文衡山に比せりと云ふ。靈長は悉く其の法を得て盛譽を吳越の間に驅せたり。惟ふに古來詩書の名、當時に高くして後世却て之を知らざるもの枚擧に違あらず。沈民則、邢子愿の如き、其の書の風格骨力、之を文衡山、董玄宰に較べて優れるものありとも劣れるを知らず。文董の名は今日儉父と雖も之を諳んず、沈邢の如きは僅に少數識者の間に云爲せらるゝに過ぎず、附和雷同は俗史の通弊なり、眞鑑者は必ず名を追ふて實を捨つるの愚を學ばざるべし。靈長の書は傳世甚だ少く、各家の著録に就いて之を索むるに、紅豆樹館書畫記の明人書畫扇冊中に、其の行書五律を載せたる外、絶えて之あるを見ず。吾齋收むる所も亦一扇面一詩冊と此の一軸とのみ。

許光祚書高啓詩冊

高一尺七分

闊七寸

紙本

計三十四幅

拳大の草書を以て高青邱の梅花七律四首を録せり。「許光祚」款署し、許印光祚の二印を鈐

せり。靈長が當時大名を負ひしは前に述べたる如し。今此の冊を見るに、宕落秀勁にして宛も祝枝山を見るが如し。青邱の詩既に清絶。之を書するに靈長超妙の筆を以てせり。珠璧を一架に見る、此の冊の如きは蓋し多からざるなり。

此の冊は夙に本邦に舶齎せり。見え谷鐵臣、山中信天翁、頼支峯等の題跋あり。

李士達巖洞高士圖立軸

高二尺八寸

闊一尺四寸二分

綾本

著色畫。白髯朱衣の高士、巖洞裏に跌坐し、前に一爐あり。釜中に菊花を煮、後に一童あり、膝を抱きて假眠す。塵外高隱の趣掬すべし。「萬曆己卯春日、李士達」小字款識あり、李印士達の一印を鈴せり。己卯は萬曆七年なり。

李士達は萬曆二年の進士なれど、早くより隱居して翰墨に耽り、碧瞳秀眉、神仙の如くなりしと云ふ。即ち此の軸に畫く所の高士は、其れ或は乃公の自像なるにあらざるか。

關思設色山水冊

各幅 高八寸

闊六寸

紙本

計十幅

關思は一名九思、字を何思、又は仲通と云ひ、虛白と號せり。萬曆崇禎の間、畫名天下に遍かりき。其の骨法氣韻は、直ちに二李三王に入れりと稱せらる。此の冊は細筆刻意の山水にして、水墨の二幅を除き、餘は皆著色なり。試みに畫境に依りて之を題名すれば左の如し。

第一幅 雲山孤村

第二幅 春江歸帆

第三幅 枯樹尖塔

第四幅 秀峯老柏

第五幅 層巒白雲

第六幅 石阜叢松

第七幅 清溪野屋

第八幅 山村煙樹

第九幅 平林遙嶺

第十幅 秋山高閣

每幅何思、關思之印、字何思の中、一印を鈴せり。末幅に「崇禎元年正月念五日、寫於白蘋州之來雲閣、關思」款識し、關思之印、字何思の二印を鈴せり。仙客、令之氏、式古堂書畫、卞永譽鑑賞印の藏印あり。即ち卞氏式古堂の舊物なり。九思の畫は舊來吾が邦に流傳すれども、多くは尋常應酬の作に過ぎず。精詣なること此の冊の如きに於いて、初めて當年の盛名に適へるを覺ゆ。

屠隆登狼山詩立軸

高七尺五寸四分 闊一尺六寸三分 絹本

行書。詩に曰はく、

高隱木末睨乾坤。絕口清秋雲霧屯。風起欲乘黃鶴舞。濤來擬卷白狼奔。
地形浩蕩開天塹。山勢巖崑夾海門。一望直通窮髮國。扶桑萬里見朝暉。

「登狼山」一首、東海屠隆書。款し屠隆之印、佛奴道民の二印を鈐せり。

長卿は晩年官を罷め、吳に遊び、江を涉りて虞山狼五の間に留連せり。此の詩は則ち其の時に成りしならむ、詩書俱に高朗佚宕、雙手に日月を提ぐるが如し。

靜志居詩話に云はく「長卿、才高からざるにあらず、而も情を縱にして奔放し、記に云へる之を裁する所以を知らざるものなり」と。施愚山は曰はく「長卿は青浦に令たりしとき、吳越の名士を延接し、青簾白舫、泖浦の間に縱浪し。仙令を以て自ら許せり。郎署に在りても益詩酒を放にしき。西寧の宋小侯、少年にして聲詩を好み。相得て懽ぶこと甚し、兩家の肆筵曲宴には男女雜坐し、絶纓滅燭の語、都下に喧傳せり。白簡に中りて官を罷め。壯年自ら聊まず、

關塞に縱覽し、尋いで吳越八閩の間を遨遊し、長篇短什、心に信せ口に矢せて出だせり」と。長卿の詩が所謂の縱情奔放にして、之を裁する所以を知らざるは、乃ち其の身境の然らしむる所なるを知るべし。長卿の鴻苞集を讀まむ者は、此の心を以て之を見るべきなり。

此の軸は舊土佐藩山内家の舊藏に係る。傳へ云ふ容堂公の書は、賴山陽より出でしにあらずして、實は屠隆を學べるなりと。公の書を將て此の軸と對照するに、其の説眞に近きを覺ゆ。

董其昌倣米山水立軸

石渠舊藏 乾隆御題

高三尺 闊九寸五分 紙本

墨畫。米家の法を以て雲山烟樹を寫し、烟雲出沒、山巒變幻の致を極めたり。用墨漆の如く、四百年後の今日、光彩尙紙表に煥發す。嘗て聞く玄宰は平生墨を選むこと尤も嚴なりきと。王麓臺は亦云はく「董思翁の筆は尙人の能くする所ならむも、其の用墨の鮮彩なること。一片の清光、奕然として人を動かす。仙なり矣。豈に人力の得て辨する所ならんや」と。此の軸を見て果して其の言の虚ならざるを知れり。款題に云はく

喬木生晝陰。古澗鳴寒溜。前村杳靄中。大有雷霆鬪。

「玄宰畫并題」署し太史氏、董其昌の二印を鈴せり。上方に乾隆御題和韻詩一首あり。
雨過樹垂珠。古屋滴簷溜。巖峯欲出頭。膩雲與之鬪。

丙戌夏御題

下に機暇怡情、乾隆宸翰の二璽を鈴せり、乾隆御覽之寶、乾隆鑑賞、三希堂精鑑璽、石渠寶笈、宜子孫、石渠繼鑑、御書房鑑藏寶、嘉慶御覽之寶の八璽具はる、左下方に商丘宋犖審定真跡の印あり。

此の軸は高韻絶倫にして、筆墨神化の域に入れり。戴醇土が董其昌を咏ぜし一絶あり、藉りて以て此の軸の評隲に當つ。

重規疊矩又翻新。灑墨如飛筆有神。一代正宗游戲得。香光畢竟是天人。

董其昌の眞蹟、世上睹る所尠からず。而も其の本領を窺ふに足るものは、十に一を存せず。此の軸は傳系既に正しく、筆墨また至精。我が邦有する所の玄宰の畫は、是を推して第一とすべし。裝潢軸匣、俱に乾隆内府貯藏當時のものにして、古澤掬すべし。

董其昌倣楊昇沒骨山水立軸

高二尺五寸六分 闊一尺一寸三分 紙本

勾勒を用ゐず、色彩を以て山を作る。之を沒骨の山と云ふ。唐の楊昇好んで此の法を用ゐき。玄宰之に依倣して畫けるもの即ち此の軸なり。絶えて墨筆を用ゐず、惟丹青を以て秋景を畫けり。紅葉青山。華麗にして別趣あり。款識に云はく

余嘗見楊昇眞蹟沒骨山、乃見古人戲筆奇突、雲霞滅沒、世所罕覩者、此亦擬之、

乙卯春、董玄宰識

下に董其昌の一印、前に畫禪の一印を鈴せり。左下方に朝鮮人安氏儀周書畫之印の一印、右下方に麓村の一印あり。即ち曾て安麓村の鑑藏を経たるを知る。時款の乙卯は萬曆四十三年にして、玄宰六十歳に當れり。

吳思亭修の論畫絶句に云はく「楊昇蒲雪畫峒關。紅艷爭看沒骨山。千載僧繇遺法盡。祇留一脈在雲間」。註に楊昇の峒關蒲雪圖の小幀は沒骨法を用ゐ、絹光極めて光潤、傅色濃艶にして青紅目を奪へり。董思翁毎に衍して長幅を爲り、筆法宛似せり。安麓村は墨緣彙觀に論じて云へり「相傳ふ設色沒骨の山水は、昔梁の張僧繇より生まれり。然れども歷朝の鑑藏及び圖繪寶鑑を考ふるに、未だ嘗て僧繇山水の語あらず、即ち楊昇の作といふをも亦未だ見聞

せず。唐宋元より以來、此の法あり。雖も、偶一圖に遇ひて其の中に稍く其の意を用ゐたるに過ぎず。また多く工筆を閒へたり。未だ全く重色を以て皴染渲暈せしものを見ず。此の法誠に千古に妙絶せり。若し文敏拈出するに非ずんば、必ず淹滅して傳ふる無きを致さん。今、古を以て新に反すを得たるは思翁の力なり。斯の法の作。余凡そ五本を見たり、皆佳なり。董其昌の眞蹟は、水墨山水すら尙之を得ること容易ならず。況んや没骨重色、此の軸の如きは博覽の士と雖も、多見を誇る能はざるべし。

此の軸は上海麗萊臣の舊藏にして、虚齋名畫錄之を載録せり。丙辰の秋、余みづから麗君より購ひ得たり。一日諸友を招きて書畫を吾齋に展觀せしとき、某氏坐に在り、見て此の軸に至り、頗る疑訝の色あり。曰く余曾て上海に在りて、某處に玄宰の没骨山水立軸を覽たり。此の軸と毫絲を違へず、頗る怪むべし。余問うて曰はく、吾兄の見たる所は、麗君所藏のものにあらざる乎。某曰はく然り。乃ち軸を翻して虚齋の籤題及藏印を示す。某一笑し衆また掌を拍てり。むかし明の王弇州は、祝枝山書せる「月賦」の卷を獲たり。陸包山見て難色あり。其の舊主を知るに及んで初めて之を容せり。云ふ。弇州は月賦の卷尾に記して曰はく「此の卷は故毛光祿の爲に書せり。光祿嘗て之を石に刻せり。而して其の家買りて以て何穎考兩日

の費に供しき。今年春、張中丞肖甫と之を閱せり。陸叔平坐に在りて曰はく是贋本なり、眞蹟は故毛光祿の所に在り。余笑つて叔平に謂つて曰はく、子は光祿が此の賦を有せしを知りて此の賦の光祿の有たらざるを知らざるかと、叔平悟り乃ち之を諦視して笑へり。古今、時を異にし、東西、地を換へ、而して事則ち相似たり。亦文苑の佳話たらずや。

董其昌臨米書立軸

高十尺六寸五分、闊一尺六寸三分、綾、本

行草書、四行。九十七字、其の文左の如し。

僕射相公鈞座、芾比留於雲久者、恐涖溯不及一見、昨略瞻望、無得志之容、有憂天下之色、足爲四海生靈賀、夫以天下之英、任天下之重、大鈞洪運、轉移造化、仁智隨識、孰窺其功、正同萬物鼓舞耳、芾雖弗文、尙能形雅成頌、勒之名山、下情瞻仰、不言而喻。

董其昌と款署し董印其昌、玄宰氏の二印を鈐せり。筆を丈餘の長幅に落して一氣呵成し、眞に腕底風を生ずるの概あり。加ふるに紋綾の精良と墨氣の煥發せるを以てす。洵に香光傳世書蹟中の精品なり。吳俊卿その縑囊に識して曰はく「予年政に七十、生平文敏の手筆を見る

を得たること數十百通を下らず。猶未だ巨幅此の如きものを見ず。老朽の眼福。仍復淺からず。

王夢樓は董臨米書を論じて曰はく「余甚だ米書を愛す、而して尤も香光の臨米書を愛す、此の中別に會心あり、皮相に在らず、蓋し米書、一たび董臨を経れば、遂に爾く飛動を轉じて靜深と爲し、奇險を化して平淡と爲し、旌旗壁壘、倏忽に觀を改む、而して原書の佳處愈々顯る、有識者當に時代を以て論ずべからざるなり」と。又曰はく「米海岳は毎に自ら腕に義之の鬼ありと稱せり。蓋し米公は右軍の傳神を善くせしが故ならむ。然れども予は竊に思へり、眞の米書を愛するは尙香光が臨する所の米書を愛するに如かずと、何を以ての故か、米書は魄力大なりと雖も、而も平淡の處に尙未だ至らざるあり。故に雲林の評跋に、子路の未だ夫子に見えざる時に似たりと爲せり。香光は深く右軍か平淡の趣を得たり、其の臨米書は正に菩薩の願に應じて梵天主と爲れるが如し。佛力の加被するを以て、恢々乎として餘地あり、或人曰く此の如くんば、則ち香光の自爲の書も亦佳ならん。何ぞ必ずしも臨米のみならむと、曰はく米が奇肆の處は、又これ香光の平日少くる所なり、奇肆を以て平淡に入る、愈妙なる所以なり」と。此の軸を見るに所謂奇肆にして平澹なるは信に夢樓の説に合せり。近人楊恩壽は亦

云へり「文敏は天資襄陽より高く、其の高秀圓潤の致は襄陽の能く及ぶ所にあらず、毎に經意せざる所に於いて丰神獨絶。微雲舒展し、清風飄拂するが如く、尤も天然の趣を得たり。惟意を極めて襄陽を摹倣せりと雖も、秀潤之に過ぎて雄奇峭拔は即ち及ばず。米董の異同此に在り、米董の得失も亦此に在り」と、是また一面の的評たるを失はざるなり。

董其昌七言絶句立軸

高六尺一寸六分

闊一尺七寸一分

綾本

草書。詩に云はく

通神筆法得玄門。親入長安謁至尊。莫恠邇來多意氣。草書曾悅聖明君。

「董其昌」の款署し、下に董氏玄宰、太史氏の二印、右方上に玄賞齋の一印を鈐せり。又下角に包長訓印、松谿珍賞の二小印あり。快雨堂題跋に云はく「董香光は明季に生れたりと雖も、而も其の書は直ちに二王を追ひ、當に顔魯公と分鏢し、米南宮をして席を譲らしむべし、元以下は論無きのみ、其の佳處は全く天真に在り、故に率爾落筆のものは愈々妙なり」と。此の軸は亦太しく經意せざるもの、如く、而も晋唐の神氣、毫端に沛然たり、其の圓潤の中に秀峭

の筆あるは蓋し鷄毫筆を用ひたるに因るか。
董書は天下其の質鼎の多きに堪へず。若し其の形似に眩惑せずして、其の神髓を捕捉せば、驪珠魚目、之を分つこと難からざるべし。

董其昌書畫合璧卷

盤谷圖

盤谷序

高一尺三寸四分 長二十二尺三寸餘 絹本

前段。著色山水畫。溪流屋宇。近岡遠山の間、煙雲縹渺として亦塵寰の氣無し、款題して云はく

韓昌黎盤谷序有云、坐茂樹以終日、濯清泉以自潔、趙吳興嘗補圖、所謂大丈夫得志之樂、未有圖之者、余寫昌黎全序、回爲山水以弁之、亦僅模吳興畫境耳。董玄宰、

下に董印其昌の印を鈐せり。

後段。行書、送李愿歸盤谷序。凡て七十六行、長さ十有七尺に及べり、卷末款識に云はく

盤谷序自楚騷發竅、儘力模寫、如宋玉招魂、晦翁乃謂、昌黎世味實重、有時說富貴、不覺流涎、韓公自云、窮愁易工、而歡愉難好、正欲于難處用長耳、回書圖後及之。董其昌

太史氏、董印其昌の二印を鈐せり、程瑤田審定、鮑約亭寶藏印等の藏印凡て七、拖尾に程瑤田の一跋あり、前後隔水に陸樹聲鑒賞章、陸印心源等の印あり。

韓退之の送李愿歸盤谷序は古今の名文にして、人口に膾炙せり、董其昌靈腕を揮ひて之を書し、又これを圖にせり、乃ち是れ三絶兼備と謂ふべく、一たび卷を展けば、大牢の盛饌、前に堆きが如きを覺ゆ。

周櫟園の讀書錄に云はく「錢虞山嘗て言へり、董文敏は最も其の筆墨を矜慎し、請乞する者あれば、多く他人を倩ひて之に代らしむ、或は點染已に就り、童僕質筆を以て相易ふとも、亦欣然として爲に題署せり、家に侍姬多く、各々絹素を具へて畫を索む、稍倦めば則ち謠もて之に繼げり、其の眞蹟を購ふは之を閨房に得るを多しとす。今日董蹟と稱するものに、多く眞偽相半せるは、蓋し此の如き因由ならむか。

董其昌山水雙卷

一、倣董米山水卷 附自跋

高一尺四分 長七尺六寸八分 絹本

一、做北苑山水卷 附自書七律三首

高八寸五分

長八尺五寸一分

絹本

此の二卷は同時の作にあらず、また相關聯せるにもあらざれども、北平の李氏愛吾廬の舊藏に係り、李氏之に同一の裝潢を施して雙卷を爲し、一匣の中に收めたり、其の匣今尙存するを以て、之を分離するに忍びず、暫く舊に従へり。

一、做董米卷。墨畫。董北苑、米海岳二家の法を併用せり、遠山は米法を倣ひ、近崗樹石は北苑に法れり、卷末に題識して云はく、

士人作畫、當以草隸奇字之法爲之、樹如屈鐵、山如畫沙、脫去甜俗畦徑、乃爲士氣、不爾縱儼然人格、已落畫師魔界、不可復救藥矣、若能解脫繩束、便是透網鱗也

畫平遠、師趙大年、重山疊嶂、師江貫道、皴法用董源麻皮皴、及瀟湘圖點子皴、樹用北苑子昂二家法、石用大李將軍秋江待渡圖、及郭忠恕雪景、李成畫法有小幅水墨及着色山青綠、俱宜宗之、集其大成、自出機軸、再四五年、文沈二君、不能獨步吾吳矣

周生以素絹索余作書畫、漫筆應之、其昌

下に董其昌、玄宰の二印を鈐せり。李雲審定眞跡、北平李氏珍藏圖書、恒山梁清標玉立氏圖書

の三印あり。前後接縫に李氏珍藏の印を鈐せり、前隔水に李氏愛吾廬收藏書畫記の一印あり、題籤に「董思翁合用北苑海嶽二家筆意自跋、北平李氏珍藏」こあり、即ち李季雲の自書なり。

二、做北苑卷。墨畫。蒼莽の致を極む、款識に云はく

戲寫吾家北苑、友人殊不見信、非不似、余亦猶不似古人耳。 乙卯菊月 董玄宰

乙卯は萬曆四十三年にして、玄宰時に六十歳なり、下に董印其昌の一印を鈐せり、卷末に寸許の草書にて、七言律詩三首を録し「乙卯歲暮、展卷閱之、因書舊作。董其昌」こ款識して太史氏、董氏玄宰、玄賞齋の三印を鈐せり、恒山梁清標玉立氏圖書、吳氏克篔、北平李氏珍藏圖書の藏印あり、前後接縫に李氏珍藏の印を鈐し。前隔水に李氏愛吾廬收藏書畫記の一印あり、拖尾に李季雲の一跋あり、題籤に「董思翁臨北苑山水卷、自書律詩三章、北平李氏珍藏」こあるは、亦李季雲の手書に係る。茲に玄宰の詩二首中より、紫陽庵の一首を録す。

初疑塵市點靈峰。徑轉幽深紺殿重。古洞經春猶闕雪。危崖百尺有欹松。
清猿靜叫空壇月。歸鶴愁聞故國鐘。石髓年來成汗漫。登臨欲愧羽人蹤。

董其昌山水册

王時敏、王鑑、惲南田、笪重光等跋

四幅 高六寸九分 闊八寸六分

三幅 高六寸九分 闊四寸三分 紙本 計七幅

墨畫。題あるもの四幅、題無きもの三幅、凡て淡墨渴筆、匆匆揮灑して逸氣紙表に漲る。

第一幅、「己巳暮春、自西湖歸、寫湖山一曲、玄宰」に款識し、昌の一字印を鈐せり。蔣文從鑒賞印、宋犖審定の印あり。

第二幅、「玄宰」に款署し、昌の一字印を鈐せり。「林杪不可分、水步遙難辨、一片山翠邊、微茫見村遠」の題詩ありて、董氏玄宰の印を鈐せり、逸芬、担齋書畫の藏印あり。

第三幅、第四幅、共に「玄宰」に款署し、昌の一字印を鈐せり、題語無し。

第五幅、「玄宰」に款署し、印無し、對題に「每觀古畫便彌拈筆、興之所至、無論肖似與否、欲使工者嗤其拙、具眼者賞其真、書畫同此一局耳、其昌、己巳仲秋」にあり、下に董印其昌の印を鈐せり、鄰煙、鄰煙藏物の二藏印あり。

第六幅、「玄宰」に款署し、昌の一字印を鈐せり、對題無し、逸芬心賞の藏印あり。

第七幅、「玄宰」に款署せり、對題に「峯巒渾厚木華滋、以畫法論、大癡非癡、豈精進頭陀而以釋巨然爲師者耶」「玄宰」にありて董氏玄宰の印を鈐せり、宋犖審定、祖永私印の二印あり。

後副頁に王時敏、王鑑、惲南田、笪重光、楊翰、秦祖永の六跋あり、王時敏の云はく「壬子嘉平、石谷過訪せり、此の冊を行笥より出だし、拙修堂に觀る、余向日藏する所の思翁の眞蹟頗る多し、而して筆墨氣韻は此の冊の最たるに如くは無し」と、惲跋の一節に云はく「文敏に及ぶべからざる所は、正に時俗の所謂拙處に在りて、乃ち其の眞を見る、眞に拙なるに非ざるなり、時俗之を拙と云へるのみ、余曾て石谷の行笥中より借觀し、因て携へて荆溪に至り、往返月を閲たり、一具眼者を求めんと欲せしが得べからず、江上御史と與に嘆息之を久ふせり」と。鈐印及び題跋に依りて案ずるに、此の冊は曾て王石谷の愛玩に係り、後秦祖永に歸せり、畫苑の巨匠より論畫の大家に轉傳せし、其の系既に奇なり。加ふるに宋漫堂の鑒賞、二王惲笪諸大家の題跋を以てす、董蹟少からずと雖も、壯觀此の如きは罕なり。時款の己巳は崇禎二年にして玄宰の七十五に當る、乃ち歿前七年なり。

董其昌書阿房宮賦冊

刻入玉虹鑑真帖

高六寸五分 闊三寸 紙本 計十二頁

楷行書。本文四十三行、款識三行、凡て四十六行。款識に云はく「戊辰上巳、舟次西湖、天雨寂

寥、偶閱宋明之阿房宮圖、展玩久之、恍然如目、曰書此賦、董其昌三。昌、宗伯之印之二印を鈴せり。戊辰は崇禎元年にして文敏七十四歳、即ち歿前八年に當れり。玉虹樓藏の外、藏印數方三陳邦彦の一跋あり。

此の書は玉虹鑑眞帖に刻入せり。便ち冊後に鑑眞帖の刻本を添装して、對勘に便にせり。思翁の小字行書は屢々之を題跋に見れども、匆率潦草のもの多きに居る。惟此の冊は經意の書にして、運腕悠揚、一筆も苟もせず。平生應酬の作三は迥然その觀を異にす。玉虹鑑眞帖に選入せる宜なり。

董其昌書謝眺詩卷

高九寸三分

長十尺二寸

紙本

大楷書。凡て二十七行。顏眞卿の筆意を用ゐて、謝眺の七言配律一首を書せり。末に「崇禎六年歲在癸酉除夕、應華東先生教、爲顏魯公書、書謝眺詩、當東閣官梅也、董其昌三款識し、後に宗伯學士、董玄宰の二印、卷首に玄賞齋の二印を鈴せり。即ち文敏七十九歳の作なり。臨川李氏、宗潮、聯秀嗣守、翊煌嗣守、世勳嗣守、雙桂齋珍藏、李翊華字子實、翊煥敬觀の諸印あり。楮

紙にして堅硬革の如し。紙色雪白、墨氣煥發。洵に董書中の精品たり。卷末に翁覃溪は「乾隆三十八年癸巳除夕北平翁方綱鑒藏」三識し、又卷前別幅及び拖尾に長跋數章あり。即ち乙未（乾隆四十年）に一跋、丙申（四十一年）に一跋、甲辰（四十九年）に二跋、乙巳（五十年）に四跋、庚戌（五十五年）に一跋、甲寅（五十九年）に一跋、丁巳（嘉慶二年）に一跋、己未（四年）に一跋、壬戌（七年）に一跋、別に歲時を記せざる一跋あり。皆覃溪の手跋なり。乾隆二十八年より嘉慶七年に至る三十年間に於いて、感興到る毎に筆を把り、跋を作れる三十又四、其の長さ丈餘に及べり。覃溪愛玩の深かりしを想ひ見るべし。跋中の一節に曰はく「此の老多く大楷を作らず。偶々一たび之を作れば輒ち優曇鉢の華、時に世間に出づるの想あり。王半山の所謂此を以て凡民を驚かすもの耶三、又曰はく「乙未夏六月、雨中雪門漁山三與に借る所の董迹を遍觀す、此の卷の上に出づるものなし」三。

引首に桂未谷の指書隸字「董學顏書」の四大字あり、亦極めて佳なり。左角に第一神品三署し、下に汚墳借看の一印あり。

董其昌臨懷素帖

高八寸六分

闊一尺一寸五分(末頁闊六寸)

綾本 計八頁

草書廿九行、懷素の自叙帖を節臨せるなり。文に云はく

懷素生於長沙、幼而事佛、經禪之暇、頗好筆翰、然未能遠觀前人之跡、遂擔笈策杖、西遊上國、雖殘篇斷簡往往遇之、豁然心胸頓釋凝滯、故禮部侍郎韋公陟、愛其筆法、勗以有成、吏部侍郎張公謂、愛其不羈、引之遊處、

「其昌書」云款署し宗伯學士、董印其昌の二印を鈐せり。長沙徐氏、儀周鑑定、皖生鑒藏等の藏印、並に李世倬、翁方綱、何紹基、外一家の跋あり。

翁跋の一節に云はく「此の書には宗伯學士の印を用ゐたり、是文敏晩年の筆なり。然して其の意は素の書を作らんと欲するのみ、懷素を臨するに非ざるなり」と、李跋に曰はく「此の幅は素師の事蹟を書し、即ち其の體に効へり、肉あり骨あり、頗る棉裏針の勢を具ふ」と。董其昌は好んで懷素自叙帖を臨せしかども、全篇を録せるは鮮し、但だ其の書は、奇趣横生して而も皆古法に根柢せり、所謂醇にして而る後肆なるものなり。

董其昌の書畫に宗伯學士の印記あるものは、天啓五年、即ち其の七十歳以後の作たるを知るべし。

董其昌臨裴將軍詩卷

高九寸

長九尺一寸五分

綾本

楷行書。本文二十四行、款識十四行。顏魯公が將軍裴旻に贈れる五言長篇を臨せるなり。款識に曰はく

顏魯公贈裴旻將軍詩真跡、婁水王敬美齋藏、在送太冲叙蔡明遠引過壞鹿脯馬病借米諸帖之外、余臨數本、係傳世間、此其一也、董其昌爲白陽老公祖書

下に宗伯學士、董氏玄宰の二印を鈐せり。畢氏珍藏、子子孫孫世世永保等の藏印凡て七、後紙に康熙年間の人畢際有の一跋あり。

王文治曰はく「香光の書は、人晋人に深きを知りて、其の唐人に深きを知らず。唐人の書尤も李北海、顏魯公兩家に深し、其の臨せる裴將軍詩は、目の及睹せし所二十餘本に幾し、佳ならざるもの無し。乃ち知る前賢用功の深き、殊に近時の及ぶ所にあらざるを」と。畫禪室隨筆に曰はく「余近來顏書を臨して折釵股、屋漏痕は唯二王に之あるを悟れり、魯公は直に山陰の室に入り、歐褚輕媚の習氣を絶去せり。而して明遠帖を臨する五百本に及べり」と云ふ。其

の傾倒想ふべし。

文董二家山水雙卷

文徵明江山煙靄圖

高七寸

長三尺四寸七分

紙本

董其昌秋山萬疊圖

高四寸八分

長六尺二寸二分

紙本

文徵明江山煙靄圖 墨畫。款識に云はく「嘉靖甲午秋八月廿有二日燈下作、徵明」云、徵明の印を鈐せり。嘉靖甲午は衡山六十八歳なり。張孝思、北平李氏所藏、李氏珍玩の三印あり。便ち愛吾廬の舊物たるを知る。陸士仁の詩跋あり。行書、二十一行、詩書俱に甚だ佳なり、拖尾に李思慶の三跋あり、中に云はく「是の卷墨を惜むこご金の如く、營邱の骨脈に依りて二米の機神を運し、參するに北苑の蒼古を以てせり」云。

董其昌秋山萬疊圖 着色畫。款題に云はく

一重山兩重山。山遠天高煙水寒。相思楓葉丹。菊花開菊花殘。塞雁高飛人未還。

一簾風月閑

辛酉九月舟行、玉峯道中寫此、 玄 宰

董氏其昌の印を鈐せり。辛酉は天啓元年にして玄宰六十七歳なり、張氏鑒藏、李氏珍玩、北平李氏所藏、黃氏家藏の諸印あり、拖尾に李思慶の二跋あり。即ちまた愛吾廬の舊藏に係れり。此の二卷は人を異にし、處を異にし、又書を異にせり、二卷の間、固より何等の交渉あるにあらず、唯李氏愛吾廬に收藏せし當時より、之を雙卷として一匣に收めたるに因りて、今また之に従ふのみ。

趙左梅花書屋圖立軸

高三尺五寸六分

闊一尺六寸三分

絹本

著色畫。樹は屈鐵の如く、山は牛毛皴を用ゆ、一種獨特の手法なり。趙左は初め畫を宋旭に學び、後董其昌に従遊し、更に董巨倪黃を追蹤せり。此の軸は其の未だ深く南宗に入らざる前の作なるが如く、馬夏の手法尙歴歷存するを見る。「梅花書屋、乙卯冬日、趙左」云款題し、趙左之印、文度氏の二印を鈐せり。乙卯は萬曆四十三年なり。

趙左千山招隱圖卷

高八寸四分

長八尺八寸五分

絹本

著色畫。卷首に小楷を以て「千山招隱圖、萬曆癸卯冬十一月、爲仲貞沈先生作、華亭趙左」と款識し、左、文度の二小印を鈐せり。

趙左は董玄宰門下の高足なり。相傳ふ玄宰の畫は趙左の手に成れるもの多し。今此の卷を見るに、玄宰の神韻を得たりと云はんよりは、寧ろ陳稟公の手法に酷似せるは奇とすべし、蓋し時代風潮の然らしむる所ならん歟、葉東卿の藏印二あり。

朱軒傲董北苑山水立軸

高四尺五寸八分

闊二尺四寸七分

絹本

著色畫。蒼潤渾厚なること玄宰の畫を見るが如し。「丁未長至前十日、寫董北苑筆意、爲君俊詞兄壽、雪田朱軒」と款識し、下に朱軒之印、韶九の二印を鈐せり。丁未は萬曆二十五年にして、雪田が進士に及第せし三年前に當る。

朱軒は初め畫を趙左に學び、後に董其昌を師とせり、時人評して「沈石田の筆力ありて、董玄宰が名貴と趙文度が天趣とを兼ねたるものなり」と云へり。

陳繼儒春陰欲雨圖立軸

高三尺九寸三分

闊一尺六寸一分

紙本

淡著色畫。款題に曰はく

遠觀諸山。春陰欲雨。風雨之朝。惟予與汝。

「眉公」と款署し。稟公、陳繼儒印の二方を鈐せり。

崇禎九年、黃道周奏疏して、身に「七不如」あるを言へり。七不如とは自己、他に比して及ばざること七あるを云へるなり。中に「志尙高雅、博學多通、不如華亭布衣陳繼儒」の一節あり。當時眉公の學藝は、石齋また推重措かざりしを見るべし。但傳世の筆墨には書多くして畫少し。特に完好なる此の軸の如きは更に罕なり。鄧秋枚は嘗て之を神州大觀に影載し、且つ評して言はく「眉公は閒、梅花を畫げども山水は殊に罕なり。此の春陰欲雨圖を見るに樹石淹潤、秀韻天成、其の畫法は頗る董思白、沈子居と相肖たり。蓋し皆松江派なり。眉公は思翁と

嘗て余山に偕隱するの約ありき。此に茅屋中に二人對座せるを畫き、而して題して風雨之朝、惟予與汝と曰へり。即ち二人偕隱の先寫照たらんか」と。此の軸の如きは蓋し眉公作品中の出色のものならむ。

陳繼儒朱文公像立軸

高三尺一寸六分

闊九寸六分

紙本

朱子の肖像を畫き、上方に「讀書樂」四首を書せり。

山光照檻水繞廊。舞雩歸詠春風香。好鳥枝頭亦朋友。落花水面皆文章。

蹉跎莫遣韶光老。人生唯有讀書好。讀書之樂樂何如。綠滿窓前草不除。

新竹壓簷桑四圍。小齋幽敞朱明照。晝長吟罷蟬鳴樹。夜深燼落螢入幃。

北窓高臥羲皇侶。只因素稔讀書趣。讀書之樂樂無窮。瑤琴一曲來薰風。

窗前昨夜葉有聲。籬豆花開蟋蟀鳴。不覺商意滿林薄。洒然萬籟涵虛清。

近床賴有短檠在。對此讀書功加倍。讀書之樂樂陶陶。起弄明月霜天高。

木落水盡千崖枯。迥然我亦見眞吾。坐觀韋編燈動壁。高歌夜半雪壓廬。

竹爐茶鼎烹活火。心清足稱讀書者。讀書之樂樂何尋。數點梅花天地心。

「白石山陳繼儒書於煮字軒」と款識し、眉公、一腐儒の二印を鈐せり。書は眉公獨特の行草にして頗る雅趣に富めり。

陳繼儒書七言絕句立軸

高四尺六寸八分

闊一尺一寸三分

紙本

草行書三行。詩に曰はく

蕭蕭洒洒數點雨。磊磊落落千章松。曉坐竹窓無過客。隔牖明月打山鐘。

「似懋徵詞兄正、陳繼儒」と款し、麋公、雪堂の二印を鈐せり。藏印一あり。

陳繼儒山居詩軸

高四尺八寸七分

闊一尺九寸二分

綾本

草行書。七言絕句一首。

一瓢隨意坐山家。醉後重扶上小車。莫咲向人驕健骨。春遊那忍負梅花。

「山居作、陳繼儒」款し下に麋公、陳印繼儒の二印を鈐せり。書法浪滄、印章欵側、便ち麋公大醉し、把管鈐印の狀観るが如し。覺えず爲に失笑す。

陳繼儒讀李鄴侯傳詩立軸

高四尺二分 闊一尺六寸四分 綾本

行草書。詩二行。

辟五穀相三帝。寢對榻出聯轡。九仙骨一品衣。功太高跡太奇。如龍見如龍潛。

吾師乎李長源。 讀李鄴侯傳作、似侶翁老先生正、陳繼儒

下に麋公、雪堂の二印を鈐せり。尹氏蘭堂家藏章の藏印あり。

陳繼儒江南秋景卷

董其昌題詩

高八寸七分 長九尺九寸五分 絹本

著色畫。「江南秋、庚申秋日、寫於含譽堂、眉公陳繼儒」款識し、眉公、繼儒の二小印を鈐せり。董其昌の題詩あり云はく

無數青山落照邊。淺沙零亂走寒泉。正女十月江南岸。閒倚荒村泊釣船。

此の時眉公は六十三歳、玄宰は六十六歳なり。眉公は玄宰と共に文苑の巨頭たり。但畫を作れるここ玄宰の如く多からず。而も一たび之を作れば、揮灑縱横、腕底の煙雲を潑し、胸中の豁達を抒す。其の神韻生動に至りては、玄宰と雖もまた時に舍を避くること無しとせず。此の卷は特に其の會心の作なるが如し。卷末に「青浦王昶藏於京師聞思精舍」の藏記あり。卷の前後に經訓堂王氏之印、青浦王昶字曰德甫、一字述庵別號蘭泉等の藏印數方あり。即ち王蘭泉の舊藏たりしを知る。末に近人の二跋あり。

陳繼儒山中作詞卷

高七寸八分 長七尺二寸二分 綾本

草書。長短句首凡て廿九行。其の一に云はく

背山臨水、門在松蔭裏、草屋數間而已、土泥牆、窓糊紙、方床曲几、四面擁書史、若問主人誰氏、灌園者陳仲子、不衫不履、短髮垂雙耳、隣叟偶來爾汝、八尺鱸一寸鯉、菱香酒美、醉倒芙蓉底、旁有兒童、大咲叫、先生看月起

款に云はく「山中作、陳繼儒」云、下に麋公、雪堂の二印、首に晚香堂の長方印を鈐せり。朱九丹の藏印三あり。絹素完好喜ぶべし。

眼福篇に眉公の書を論じて云はく「書家は謂へり其の董文敏と名を齊ふす云、而も山人の詩は字より優り、文敏の字は詩より優れり。たゞ山人は字學怪誕の時に當り、力めて狂瀾を挽へし、獨り正軌を宗せり。推して勝國中興の名手と爲さざるを得ず」云。亦知言なり。

陳繼儒詩帖册

高七寸三分

闊一尺

紙本 計八頁

草書。七言律詩四首。左の如し、

年少朱衣馬上郎。青葙第一姓名香。泥金帖報黃金屋。種玉人歸白玉堂。

北面謝恩才合卷。東方待曙漸催粧。詞臣何以酬明主。願進關雎窈窕章。

仙女吹笙忽下樓。問年十七尙含羞。五銖錢串同心結。百和香勻半臂鞦。

鏡裏見人驚却步。夢中索母學梳頭。起來咲點花枝戴。多子先教采石榴。

充閭佳氣接三臺。忽抱麒麟送入懷。良友人人開口咲。好兒介介踏肩來。

冰壺初浸雲閒月。玉尺難量天下才。侂日弟兄同就學。名山高築讀書臺。

呼吸眞通帝坐邊。文星高並法星懸。承蜩能了如山牘。飲馬常投酌水錢。

一而網開仁者壽。五車書破古之賢。金華山水神仙吏。只在先生蠟屐前。

款識に云はく「崇禎戊寅長至後二日、偃曝之暇、書於神清室、陳繼儒」云、下に麋公、陳印繼儒の二印を鈐せり。又逆入平出、戎馬書生、頤情志于典墳、包法、松風水月等の諸印あり。其の何人の印記なるかを詳にせず。戊寅は崇禎十一年なり。眉公は翌十二年、八十二歳を以て歿せり。

陳繼儒義烈蕪碩人傳卷

高九寸八分

長三尺三寸三分

冷金箋本

小行草書。三十三行。末に「己卯八月、八十二翁陳繼儒撰」云款識し、陳印繼儒、眉公の二印を鈐せり。

眉公は年二十九にして儒冠を焚棄し。屋を昆山の陽に結びて、風雅自ら娛めり。其の詩文書畫は、老いて倍々甘熟を極め、短翰片縑と雖も、人争うて之を寶とせざるはなし。此の卷は即ち其の歿年の作に係り、尤も老成の筆致を見る。又此の文は眉公文集に之を逸せり、倍々以

て珍ごすべし。

鄭約傲古山水大冊

楊文驄、董其昌、
陳繼儒等跋

高一尺四寸

闊一尺強

紙本 計十二頁

冊中七幅は淡著色畫。五幅は墨畫なり。每幅に淡公、鄭約の二小印を鈐せり。末幅に款識あり、云はく

乙亥臘月、余客西湖、是日雪霽、倚窓遠眺、適新安孺子、棹小艇訪余、并携宋元諸名家畫見示、余展閱、不覺狂舞叫絕、遂呵冰硯、傲其二三、恨不能手握双管、一霽俱下、今春家食、猶忽忽夢寐間、殆所謂只尺之内、神遊萬里、復以意了其遺漏、開是冊者、作殘山剩水觀可也、時穀雨後十日、鄭約記、

乙亥は崇禎八年なり、即ち此の冊は翌崇禎九年丙子の作に係る。畫は傲古の大作にして、精緻絶倫。加ふるに紙色の潔淨なるを以てす。展看の間、心目自ら清快を覺ゆ。蓋し多く得易からざる精品たり。

後副頁に王匡、楊文驄、管席、董其昌、陳繼儒、延年居士の諸跋あり、楊、董、陳の三跋は寸許の

大行草書にして、尋常題跋に見る所と其の趣を異にす。跋文左の如し。

余過雲間、便與澹公、作莫逆交、觀其筆墨双絶、心實欽之、盖得大小李將軍之神骨、而濟以元季諸君子氣韻者也、此冊特其一斑、然已具大神力、新篁出籜、便爾凌雲、澹公從此傳矣、丙子十一月望日、楊文驄題於雲間之鶴巢、(文驄、龍友の二印を鈐せり)

太白、有少年上人號懷素歌、吾鄉鄭澹公之畫、足配之、不獨以其幼清之年、天機妙悟、亦謂素師自叙、恨不能遠睹前人之蹟、擔笻策杖、西遊上國之意同也、題此畫冊、須其歸時、更有印證、八十二翁其昌書(青宮太保、董印其昌の二印を鈐せり)

此冊吾友鄭澹公所作、鳳鷄破殼、便有飛翔千仞之意、且日坐董思翁畫室、熟觀唐宋元及吾朝先輩真蹟、串習臨摹、一筆不苟下、一友不妄交(中畧)思翁極重其畫、道余獨重其人品(中畧)今澹公年似給童、而品畫雙絶、斯真鼎足也、丙子端陽、七十九翁陳繼儒記於頑仙廬(稟公、陳印繼儒の二印を鈐せり)

鄭約は董玄宰に従ひて畫を學び、楊文驄、陳繼儒等の後輩にして、又交友たりしは、以上の跋文に徴して明なり。而も其の名の後世に傳はらざるは、想ふに中年夭折して、作品多く流傳せざるに因るならん。遮莫れ畫は至精にして、跋は一流の名家の作なり、最も珍襲せざるべ

からず。

僧智舷題畫詩立軸

高三尺三寸八分

闊一尺二寸五分

絹本

草書。古詩一首。詩に曰はく

千山雲頭黑。萬山雨脚白。大風卷却屋上茹。牀頭書卷盡打濕。幽人縮頂破窓裏。

壁上蘚長數尺。若得谿流直到牀。釣竿挿向枕頭石。

「題破窓風雨圖、智舷」款識し釋氏智舷、秋潭の二印を鈐せり。

此の詩は明詩綜之を採録せり、但第六句の「壁上蘚長數尺」は詩綜には「壁上蘚花長一尺」とあり。孰か定稿なるを詳にせず。

靜志居詩話に云はく「上人餅錫の舊地は金明寺の湖天海月樓の東に在り、老梅あり牕に横はる、日に其下に吟咏し、後郊西の黃葉庵に移れり。邨深く水曲り、物外蕭然たり。而も行草書を善くするを以て造請戸限に滿つ、上人亦煩を憚らず、求むる者あれば必ず應ず」と。陳眉公曰はく「秋潭老人は初め范蠡湖に居りぬ、詩法清麗、一切の流俗を屏除し、晩に黃葉庵に投ぜ

り。人愈々枯にして品愈々澹なり。其の詩を讀むに枯木寒灰の意隱隱として筆端に見はれ、清真蒼老、益々妙境に臻る」と。

上人嘗て雜詩四首を書して、慈感寺の内悝和尚に贈り、徐天池爲に圖を作れり、古縁萃録に載する所の「徐青藤釋葦如詩畫卷」是なり。左に其の一首を録す。此の軸の詩と併せ讀まば、以て其の詩品を知るに足らん。

郭西禪寮竹下

調得奔猿似木鷄。漫空顛絮落爲泥。有人索問庵中老。垢在衰顏雪在眉。

范允臨書七言絕句立軸

高四尺三寸七分

闊一尺三分

紙本

草書。詩に曰はく

或棹輕舟或杖藜。尋常適意釣前溪。草堂竹徑在何處。落日孤煙寒渚西。

「范允臨」款を署し范印允臨、長倩の二印を鈐せり。

長倩は嘉靖に生まれ、崇禎に歿し、董玄宰と時を同ふせり。當時長倩の書畫を索むる者踵を

接し。斷簡片楮も、人之を珊瑚鈎に比し。其の名、玄宰を凌ぐものありしと云ふ。今此の軸を見て、當時推重せられしも故無きにあらざるを知る、而も長倩逝きて三百年、今日人の長倩を言ふ者無きは、其の何の故なるかを知らず。

范允臨自書詩帖卷

高九寸一分 長四尺六寸五分 紙本

行書。五言律詩四首。初月、花鴨、鸚武、江梅を咏ぜり。款識に云はく「辛酉季冬一日、書於天平山舍、范允臨」云、范允臨印の一印を鈐せり。卷首に蕭蕭閣の一印あり、亦長倩の印なるが如し、別に藏印二あり。

長倩は嘉靖三十七年に生れ、崇禎十四年、八十四歳を以て歿せり、此の卷を書せる辛酉は天啓元年なり、長倩時に六十四歳、乃ち官を辭して別業を天平山に築き、彈絲吹竹、詩酒徵逐の樂を擅にせる時なり。古人、長倩の書を論じて「一たび毫を揮ひて紙に落せば、以て董香光工を爭ふべし」と云へり。施愚山また長倩の詩を評して曰はく「意匠浮動、墨瀋橫飛、未だ嘗て琢句鑿績を以て工を爲さず。雪山池中の甄陀女が歌聲柔軟にして、能く清淨五百仙人をし

て、皆心逸して自ら持せざらしむるが如し」云。乃ち詩も亦超凡の譽ありしを知るべし。

沈士充秋景山水卷

高九寸一分 長四尺四寸五分 紙本

著色畫。溪谷巉巖清流激湍。危樓あり、茅屋あり。松柏、綠尙衰へず、丹楓、霜に飽く。款識に云はく「癸酉長夏寫、沈士充」云、子居の一印を鈐せり、癸酉は崇禎六年なり。子居は宋石門趙文度の門に出たり。然れども其の手法は必ずしも石門文度と同じからず。巧細にして而も韻致多きは、出藍の才と稱すべし。

高攀龍尺牘小軸

高九寸七分 闊四寸三分 紙本

逋税を論じたる手札なり、「朞服弟攀龍頓首」云款せり。上款は「我丈」このみにて、何人なるかを詳にせざれども、文中に「東林此月之會、兄決不可不來矣」の一節あるを以て見れば、その東林黨の人たること明なり。高攀龍は東林の領袖にして、一代の鴻儒なり。其の逆璫の追逋を

逃れ、池に投じて死するに至るまで六十五年の一生涯。竟に道學文章の外に出でざりき。所以に其の翰墨の世に流傳せるは極めて罕にして、纔に手札文稿の類に依りて、其の手蹟を窺ふここを得るのみ。輒ち此の小幀も亦蒼龍の遺鱗たらずんばあらざるなり。

魏大中書七言絕句立軸

高四尺五寸

闊一尺二寸二分

綾本

草書。三行。詩に曰はく

公事回來夜雪埋。兒童燈火小茹齋。人家不必論貧富。纔有讀書聲便佳。

「大中」三款を署し、魏大中印の一印を鈐せり。

魏大中は楊漣、左光斗等と天啓六君子の一人にして、其の朝に在るや力めて激濁揚清を以て任を爲し、遂に逆璫の手に斃るゝまで、一日も詩酒翰墨に親しむの暇なかりき。其の詩書の後世に遺れる寥寥たるは是れが爲なり。然れども公は文事を解せざるにあらず、靜志居詩話に云はく「公は忠節骨鯁の臣なり、然れども頗る心を風雅に留めき。里人王屋布衣、詩を能くす、公其の賦秋蘭の作を見て之が爲に擊節す、文會に値り公曰はく、秋蘭を賦せし者は孰ぞ

と起つて復之に揖せり、布衣、公の知に感じ、公逮られし日、徒步して之を境外に送り、涙を揮うて別れき」と。惟ふに其の平生は家國の艱難に當り、志す所は援世翼教に在り、故にその發して詩詞を爲れるは、正道の意を寓せざるは無し、明詩綜に公の詩二首を載せたり、今試に其の一首を左に録す、此の軸の勵政獎學の詩意を併觀せば、公の心事の一斑を知るに足らん。
一夜秋聲萬木寒。乾坤何處足彈冠。時名盡向黃金起。世事都堪白眼看。
己自故人嗟落魄。更誰同病問加餐。風塵伏枕衡門隱。行路於今轉覺難。
公の詩書の吾が邦に傳はれるは此の軸の外、未だ有る所を聞かず、亦これ吾齋の琳瑯なり。

程嘉燧崖壑峭壁圖立軸

高三尺六寸二分

闊一尺三寸五分

紙本

淡著色畫。款識に云はく

久留昭慶、再至初陽臺、味葛仙井、最後九月、從石徑通旅泊庵、因畫崖壑峭壁之奇、其下瑤瑤寺幽邃、蘿木陰翳、皆可遊憩、飯後漫作此圖並記、偈庵嘉燧
下に孟陽、嘉燧の二小印を鈐せり、清溪徐氏家藏の藏印一あり。

桐陰論畫に孟陽の畫を評して曰はく「深靜枯淡なること畫その人の如し、當日輕輕しく人の爲に點染せざりき。故に傳世多からず、余尺幅數幀を見たり。意趣閑逸、思致遒勁にして、塵俗町畦、掃除して殆んど盡くせり」と。今此の軸を見るに、遒勁は有れども深靜は未だ到らず、枯淡は見ゆれども閑逸は尙乏し、惟布局用筆、人の意表に出で、庸史の企及し能はざるものあり。

程嘉燧枯木竹石圖立軸

高五尺一寸

闊一尺三寸九分

絹本

墨畫。枯木竹石。逸趣掬すべし。款題して云はく

徐卿生子從來晚。復見鄰家會德星。尙齒何須三老爵。娛賓不讓五侯鯖。

春風玉茁蘭牙小。明月珠圓海蚌靈。有客乞詩無好句。欲傳圖畫付添丁。

雪窓閒坐、客有索畫、並書舊題爲祝、乙卯冬日、松圓程嘉燧

程嘉燧印、孟陽の二印を鈐せり、左方下に鐵雲の小印あり、乙卯は萬曆四十三年にして、孟陽五十歳なり。

程嘉燧松林江山圖卷

高六寸四分

長十五尺五寸五分

紙本

淡著色畫。卷末に「崇禎乙亥冬、程嘉燧」と款識し孟陽の小印を鈐せり。乙亥は孟陽七十一歳に當る。筆意溫潤、紙素潔淨。松圓老人晩年の作にして、一段の清趣を覺ゆ。

孟陽は吳梅村の所謂る畫中九友の一人なり。梅村の九友歌に云はく

松圓詩律通清謳。墨莊自畫歸田游。一犁黃海鳴春鳩。長笛倒騎烏犍牛。

此の卷の圖局を見るに、閑逸の致、宛も此の詩意を寫せるに似たり。

女史馬慈靜觀音大士小軸

高二尺七分

闊八寸四分

綾本

白描を以て觀世音を畫けり。左手盆を捧げ、右手花を授くるの狀を爲す。傍に一童ありて合掌禮拜す。描線細緻なること蜘蛛の如し。小行楷書款に云はく「奉佛弟子馬室邢氏沐手謹寫」と、慈靜の二字印を鈐せり。觀音大士は馬女史の尤も得意とせる所にして、深く管夫人の遺

法を得たりと稱せらる。款字亦甚だ佳なり。陳維崧の婦人集に云はく「臨邑の邢慈は子愿先生の妹なり、善く「観音大士を書けり。莊嚴妙麗にして、用筆は玉臺の膩髮、春日の游絲の如し」。今此の軸を見て此の評の殊に妙なるを覺ゆ。女史に靜坐詩あり、曰はく「荆釵裙布念重違。掃室焚香自掩扉。莫向吹簫羨羸女。多年已辨五銖衣」。此の道心あり、即ち観音を畫いて靈妙に入れる所以なり。

女史馬慈靜書性論立軸

高六尺六分 闊一尺八寸二分 綾本

草書。五行。孔孟の性論を書せり、「武定馬邢慈靜書」と款して慈靜之印、邢氏書畫の二印を鈐せり。邢は本姓にして、馬は嫁後の姓なり。故に馬邢といへり。李竹朋は其の書畫鑑影に、慈靜の畫石幅を載せ、其の題字を評して、邢子愿に異なるなしと云へり。今此の軸を見るに洵に其の言の如く、筆法全く乃兄に酷似せり。縑素の黯きは惜むべきも、刻本芝室堂帖の隔簾觀花の憾あるに比すれば、精彩奕奕たるを覺ゆ。

薛素素蘭竹雜花卷

張鳳翼題詩

高九寸一分 長十六尺四寸 紙本

「清簫畫裏欲黃昏。風景依稀認白門。休話當年金粉事。板橋秋雨沒苔痕」。これ王夢樓が薛素素の小照に題せる詩なり、素素は一校書に過ぎざりきと雖も、萬曆の中葉より今に至るまで三百五十年、其の詩畫風流の名、今尙嘖嘖として衰へず。蓋し馬湘蘭と俱に明季歌妓の雙珠なり。此の卷は水墨を以て蘭を畫き、配するに矮竹雜花、秀石靈芝を以てせり。卷末に小楷を以て「己亥春日、薛素素寫」と款識し、薛印の一小印を鈐せり。蘭竹は素素が得意とせる所にして風姿楚楚、意態神に入る、張鳳翼の題詩四首あり、己亥は萬曆二十七年にして、此の時伯起は齡七十三歳なりき。

相傳ふ董玄宰は嘗て素素の描せる水墨大士の圖に題するに、小楷心經を以てせり、伯起は此の卷に自作詩四首を題せり。當時文苑士夫の素素を推重せしこと想見すべし、左に伯起の一首を録す、

漢臺楚縣總消沈。一曲離憂寄綠琴。獨自芬芳在空谷。不知誰復是同心。

薛素素倣子昂蘭花卷

高一尺四分 長十三尺七寸二分 紙本

墨蘭。叢生のものあり、折杖のものあり、處處竹石枯樹を交へ、妍雅幽寂の致を盡くせり。卷末に款識して曰はく

己亥新秋、假寓青園、閱趙文敏畫蘭、戲倣似紫函道兄、知不足噴飯也。

薛素素

下に第五之名、薛素の二印を鈐せり。別に藏印一あり。己亥は萬曆二十七年なり。

明の中葉歌妓の繪事を能くせしは、前に馬湘蘭あり、後に薛素素あり。素素は好んで水仙と蘭を寫し、晩年、時に觀音大士を畫けり。李竹嬾日華は素素の花裏觀音像に跋して云はく「薛姫は挾彈、調箏、鳴機、刺繡を能くし、又善く眉を理し髻を掠し、人間喜ぶべく樂むべく、以て男子を娛ましむる事は、種種皆其の手に出づ。然れども花繁り春老いたる後は、人情、綠陰青子の思あるを免れず。姫、力を着くべきなし、今また繪法を以て大士を精寫し、天下有情の夫婦に代りて嗣を祈れり、此又姫が己の分上に於いて、一段の大闕陷を補へるなり」。佳人の暮年は英雄の末路に同じ、思うて此に到れば誰か惻惻の情に勝へんや。然れども其の盛時に

在りて、白馬金鞍の貴公子より、角巾長髯の老士夫に至るまで、争うて其の一顧眄を得るを以て誇ごせしを思へば、素素も亦豪ならずや、董玄宰は尤も能く素素を識れり、世に流傳する所の素素の畫蹟に、玄宰の詩題あるもの頗る多し。人若し此の墨蘭卷を展きて而して玄宰の句を想はゞ、當年綠酒紅燈の下に詩畫應酬せし風流韻事、恍として眸裡に浮かばんこと。因て玄宰の題詩を左に録す、

幽姿閒靜倚新妝。暗裡時聞度異香。不是來從神女步。何因涉水濕羅裳。水仙

清風從東來。幽香忽西去。欲以遺所思。所思在何處。蘭石

王鑑跋

馬守眞蘭竹卷

高八寸八分 闊一尺八分 紙本 計三葉

鉤勒の蘭を畫き、添ふるに雜花竹石を以てせり。款は每幅異なり、曰はく湘蘭馬守眞寫於秦

淮水樹「曰はく「湘蘭子馬守眞作」曰はく「馬守眞學趙彞齋」、皆湘蘭、玄女子の二印を鈐せり。

筆墨清楚、湘蘭其の人を見るが如し、卷後別幅に、王廉州が王百穀の詩を録せる一跋あり、

水流花謝斷人腸。一簇金釵土亦香。大抵情緣終不改。來生還要嫁王郎。

余曾過西田、紙窓竹屋之所、得觀湘蘭子小幅、百穀有此句題于上、可謂情種種、觀此冊幅有餘紙、輿以錄之、康熙癸丑仲春二日、湘碧王鑑。

馬守眞は秦淮の名妓なり。畫蘭を善くせるを以て自ら湘蘭子と號せり。薛素素と時を同ふし處を異にして、藝色一世を傾動せり。相傳ふ王百穀曾て湘蘭の難を救へるこゝありき。萬曆三十年壬寅、百穀七十の初度に當り、湘蘭樓船を買ひ、美妓數十を載せて飛絮園に到り、酒を置き觴を稱ぐ、時に湘蘭己に五十七歳、容華少しく減じたれども風韻故の如し、百穀戯れて曰はく、卿は眞に鶏皮三少なり、惜むらくは余申公の巫臣たる能はざるのみ。當時嘖嘖として勝事を誇れりと云ふ。此の王廉州書する所の百穀の詩を讀むに、湘蘭は百穀に先だちて、白玉樓中の人と爲りしが如し、落花流水に腸を斷つもの、豈啻百穀のみならんや。清の王鳴盛に亦湘蘭の畫蘭に題せる詩あり。西泚集に載す。左の如し。

題馬湘蘭畫蘭三首

九畹湘英識小名。板橋人去野煙平。南朝金粉春風筆。十幅蠻箋剩寫生。
曾聞季布擅紅妝。未嫁雲英暗自傷。莫訝當門偏不采。也同空谷出幽香。
橫波落墨儘扶疎。色藝雖均命不如。羨殺眉樓裙子上。新詞題徧老尙書。

喬一琦書東坡語立軸

高四尺一寸七分

闊一尺三寸二分

綾本

草書三行。蘇東坡の語を録せり、曰はく

東坡云、吾輩在世、如人之有眉、雖無大用處、然亦不可少耶、喬一琦

下に喬伯圭印、一琦の二印、右方上に節制軍門の一印を鈐せり。

此の軸は後に掲ぐる所の祭弟文と筆意全く同うして、老勁之に過ぎたり。懷素の神髓、在處に迸露せるを見る。

喬一琦祭弟文卷

高九寸九分

長十一尺六寸五分

綾本

草行書。四十七行。筆を起して曰はく

維萬曆四十六年歲次戊午四月庚寅朔、越十四日癸卯、愚兄一琦、謹以清觴庶羞、致祭於亡弟文林郎臨海知縣大孝君平之靈云云、

筆意高逸。往往倪鴻寶に酷似する所あり。喬將軍は萬曆三十一年癸卯、武舉に中り、後十五年萬曆戊午の八月、韃靼入寇の時、戦ひ敗れて難に殉せり。即ち此の書は其の死に先だつこと僅に四ヶ月の作なり。書法は倪鴻寶に類し、又處處顏魯公の筆意あり。往昔顏魯公は爭坐位帖を書して幾も無く難に殉せり、事蹟相似て、手蹟亦相類せり、奇なりと云ふべし。瞿然恭は卷首に「書法與爭坐合璧」の七字を題せり。亦此の意を寓するに似たり、此の卷は上海出版の影本あり世に行はる。

將軍は詩文皆佳ならざる無きも、特に書法に卓絶せり。少時俠行を以て獄に入り、獄中に懷素を學べり。後、遼東廣寧の尉となり、兵を滴水崖に屯せし時、「鎮星之精」の四大字を石に書せり。方廣尋丈、空を凌いで矗立し、遠近之を見て其の魄力に驚かざる者無かりきと云ふ。書に於いて天分甚だ高きを見るべし。

婁堅雜書冊

高八寸四分

闊五寸一分

絹本 計十四頁

初四頁、行書。款識に云はく「右漫錄鹿門隱書、行書得三條、丁巳四月雨窓、堅識」三、字子柔、婁

堅之印の二印を鈐せり。中四頁、草書。唐詩三首、款識に云はく「倣晋草書、唐人詩三絶、婁堅」三、婁堅之印、字子柔の二印を鈐せり。後五頁は楷行書。七律詩四首、末頁に款識して云はく「首夏日永、客來圍碁已闌、僅及未刻而別、乃取几上屬書冊、爲寫各體、逮筆慵而止、乃友人所留、已隔歲久矣、欲索行楷草、予老眼眇昏、不能作楷、僅題數字於後、或差足慰其望也、若工拙當俟覽者平章、不敢似少年人、自爲色喜、歇庵道人堅識」

婁堅之印、字子柔の二印を鈐せり。此の冊は萬曆四十五年、子柔五十一歳の作なり。錢謙益の婁堅傳の一節に云はく「書法天下に妙なり、風日晴美、筆墨精良なれば、方さに欣然として翰を染め、迫促を受けず」と。當時の交此の冊を見るに書法は李北海より出で、參するに東坡を以てし、風骨極めて高し。當時の交友、程孟陽、嘉燧、李檀園、流芳は畫を以て名あり。其の畫ける所今尙流傳少からざれども、惟子柔の書に至りては之を睹ること甚だ罕なり。蓋し書は俗目に入り難く、畫は好尙に適ひ易し、是れ畫の長く傳はりて、書の早く泯滅に歸する所以ならむか。

卞文瑜倣古山水冊

高一尺

闊七寸八分

絹本 計八幅

著色畫。馬遠、馬和之、巨然、王叔明、倪雲林、方方壺等を倣ひ、每幅款題鈐印あり。末幅に「乙卯蜡月、寫冊葉十幀、下文瑜」を款識し、文瑜の小印を鈐せり。即ちもこ十幅なりしが、何の時にか二幅散佚して、今は八幅を存するのみ。潤甫の畫は、人間存する所極めて少し、即ち八幅も亦これ朱鳳の墜毛たり。冊前別幅に「桐軒韻事」の四字ありて「士標爲潤甫道翁書」を款せり。即ち查梅壑の書なり。

潤甫は董其昌に従ひて畫を學べり。故に其の筆法、尤も玄宰に近し、論畫家は評して「筆致幽秀、逸趣橫生、眞に能く煩襟を洗滌し、人を引きて勝に入らしむ」と云へり。吳梅村は畫中九友歌を作り。董其昌、王時敏、王鑑、李流芳、楊文驄、程嘉燧、張學曾、邵彌の八家に潤甫を加へて九家とし、以て當時畫苑の冠冕を爲せるを見ても、潤甫の畫品の極めて高きを知るべし。唯其の眞蹟の今に傳はるは、玄宰、西廬の少きよりも更に少きは恨むべきなり。

米萬鍾勺園對雪詩立軸

高九尺六寸五分

闊二尺

綾本

大行書。七言絕句一首。

纖聲領風雪攪攪。狂花剪寒雲葉巧。爐紅盃暖詩欲成。快士正來梅正俊。

勺園香醉簾對雪、米萬鍾を款し、下に米萬鍾字仲詔、洞天靈煙山長の二印、右方上に書畫船の一印を鈐せり。

友石は自ら米芾の後裔を稱せり。而して其の書また海嶽の遺韻あり。此の軸は尺許の大字行にして、所謂る兔起鶻落の勢あり、殊に雄快を覺ゆ。

米萬鍾登岱詩立軸

高六尺三寸八分

闊一尺七寸七分

綾本

草書七律一首。曰はく

閒曹行役未須嫌。耐可奇探借隙兼。囊草好求青帝潤。山春合倩韻人添。

恠巖在路偏宜誤。野蕪需僧反厭廉。石秀松喬泉更冽。獨憐無客解相淹。

「登岱十二首之七、書於海上鼇柱山之水月樓、米萬鍾を款識す。後聯「在」の一字を誤脱し、結句の下に之を補書せり。

山水自有清音、米印萬鍾、仲詔氏の三印を鈐せり、書豪勁にして骨有り、肉有り、筆勢の馳る所ただ矯拔異常と言はんのみ。友石が進士に第せしは萬曆二十三年乙未なり。其より二十四年後、萬曆四十七年己未に岱嶽に登り。此の詩を賦せしなり。此の軸は時款なし。雖、その晩年の作たるを知るべし。寶迂閣書畫錄に「米萬鍾登岱詩卷」あり。詩八首を録せり、中にまた此の七律あり、但首句の「未須」を「最堪」とし、後聯の「野蕪」を「澹味」とせる等、二三辭句の相異なるを見る。未だ孰れか定稿なるを知らず。

米萬鍾題畫詩立軸

高十一尺三寸七分 闊三尺三寸二分 紙本

大壁紙に尺餘の大草書を以て七言絶句一首を書せり、曰はく
 雨過巖泉吼玉虹。偶乘爽眺策谿風。美人應在煙蘿裏。天外危樓鳥道通。
 「題畫之二、米萬鍾」と款し、下に米萬鍾字仲詔、洞天靈烟山長の二大方印、右方上に書畫船の一長方印を鈐せり。書法豪宕雄偉、群を拔けり。之を大堂に掲げて眼を其の浩蕩の筆に放てば、

胸裡の鬱懷、倏然として雲散するを覺ゆ。

歸昌世柴公墓誌册

高九寸 闊三寸八分 紙本 計三十六頁

行書、百四十三行。册首に「明故廣西柳州府通判存赤柴公、暨元配顧安人、繼配王孺人、合葬墓誌銘」と書し、末に「婁東南郭張采頓首撰文、同邑七十二老人年家歸昌世書丹、八十一老人眷弟顧天叙篆蓋」とあり。老筆古勁、力紙背に透る。此の册を見て初めて假庵の書名明季に高かりし所以を知る。

曹學佺書五言律詩立軸

高四尺五寸八分 闊一尺二寸一分 綾本

草書。五言律一首。字勁挺にして流暢、一望して明代能手の書たるを知る。詩に云はく
 久不到君家。秋探未有涯。蓮隨山氣長。松逐水光斜。塢圃此閒過。午聲無外譁。
 楸枰更勝負。於我亦何加。

「學佺」署款し、曹印學佺、能始の二印を鈐せり。

能始は學問節義黃石齋、倪鴻寶の諸賢と軒輊する所無きも、其の墨蹟は二公に比し之を睹るここ鮮し、此の軸尤も貴重せざるべからざる所以なり。

葉進卿曰はく「能始の詩は三百篇に刻意し、材を漢魏に取り、下王韋に及べり。其の旨は沈にして以て深、其の節は紆にして以て婉。其の辭は清麗にして而して曠絶なり。初は衆の譁ふ所となりしが、久うして世之を稱せり」と。朱竹垞の明詩綜は、各家の詩を收むる僅に一家數首に過ぎざるに、惟能始の詩を載するここ四十一首の多きに及べり、以て推許の至れるを見るべし。

文震孟白石園聞鶯詩立軸

高六尺六寸七分 闊一尺六寸五分 綾本 信二十六頁

行書。七言律詩一首。云はく

兩載塵客溷帝京。綠楊今日一聞鶯。門臨流水心如洗。堂倚風松耳暫清。
暮景樓臺偏設色。緯人花竹倍含情。浮沈散吏眞兼隙。乍入名園愧此名。

「游白石園聞鶯憶歸一首、書似璞玉給諫先生正 文震孟」署款し、下に文印震孟、狀元宰輔の

二印、右方上に玉音香浸墨□の長方印を鈐せり。九丹鑿藏、叢碧籜の二藏印あり。

湛持は何吾騶等と共に明季國難に際して、獻替の任に當れり。一木遂に大厦の頽るゝを支ふ能はざりしかど、其の奉公の至忠は人皆之を諒せり。後世湛持の名を重んずる所以は、豈惟詩書の末技のみに在らんや。

文震孟詩餘小軸

高一尺一寸二分 闊八寸 灑金箋

行書。詞一闋を録せり、文震孟署款し、下に文起子の印を鈐し、右方上に竺隱の一印あり。

文震亨石窟詩小軸

高一尺一寸一分 闊八寸 粉金箋

崇禎甲申、京師陷り。帝萬歲山に崩しぬ。文震亨は其の翌年乙酉、粒を絶ちて死せり。洵に曾祖衡山の名を辱めずと云ふべし。此の軸は行楷書、五律詩二首、「秋日登石窟二首、文震亨」

款し、文震亨印、啓美の二印を鈴せり、書は家學を承きて秀麗見るべし。

何吾騶麥餅宴詩卷

高九寸八分

長四尺三寸八分

金箋本

草行書。七律詩四首。草法縱逸、難解の字少からず。全詩を左に録す

聖主勤民事事脩。麥新初薦社筵優。傾盤乍覺團如月。舉箸爭傳大有秋。

蒸□二農開望眼。歡傳五世紹貽謀。尋常講幄如環賜。偕醉千官夢轉悠。

世宗改不落英拾四月五日至今五世

爲喜甘霖命大官。祥開岐穗擁朱欄。制傳內殿恩先滿。春在三條賞未殘。

藿食豈知來禹食。玉盤猶擬見湯盤。一聲一曲思何限。能及郊原麥秀寒。

雲上親瞻咫尺天。星羅尊俎御樓前。不忘浴佛先三日。大嚼來牟在五年。

却憶紅綾成往事。倘無白面作新傳。素餐祇恐貽青史。十字何須費萬錢。

養賢原故及元元。況藉吾民着普存。萬粒田閒戒主德。一圓天上飽君恩。

張筵並得傾維斗。宣食毋煩問市垣。擬向歸途歌鼓腹。四郊猶恐歎壺餐。

麥餅宴八首之四、書似蘿月詞宗正、何吾騶

下に何印吾騶、龍友氏の二大印を鈴せり。書は董玄宰の手法に似て、老勁之に過ぐ、蓋し明季能書の一人たるを失はず。

龍友は社稷困頓、奸臣柄政の時に入閣し。文文起等と共に侃諤の誠を盡せり。その扶翼功を奏せざりしと雖も、一片熒熒の念は詩賦の間に於いても亦之を見るべし、今此の一卷に對して覺えず襟を正うす。

李流芳江山樓閣圖卷

高六寸七分

長四尺二寸

紙本

淡墨畫。山石は渲染と點苔を主とし、概ね皴を施さず。即ち檀園獨得の筆なり。慎娛居士流芳ご款を署し、李流芳印の二印を鈴せり。藏印凡て十又一、中に文震孟印、文起の二印あり。即ち文震孟の收藏を経たるを知る。

秦祖永は檀園の畫を論じて「筆力雄健、墨氣淋漓、分雲裂石の勢あり。後の先生の畫を摹す者は、須く先づ其の溫和恬靜の氣を養うて、而る後先生の風骨神彩を研求せば、則ち霸悍の習、自ら除かれん」と云へり。今此の卷を見るに、筆力雄健にして而も獷悍に陥らず。亂頭粗服の

所に、却つて書卷の氣を見る、これ庸史の及び易からざる所なり。

李流芳傲荆關山水長卷

高一尺 長十七尺五寸 紙本

墨畫。大山水なり、土坡山巒は皴擦を用ゐて處處に點苔を施し、全く渲染を加へず。卷末に款識して云はく

自吳門歸、風寒閉門、燈下酒闌、小有畫思、數日前、城南夏君致此卷、頗長、經三夕而後成、皆捉筆正鋒而爲之、荆關之法、不傳久矣、世有智者、方可與談此畫也

戊午十月、慎娛居士李流芳題

李流芳印、長蘅氏の二印を鈐せり、又藏印數方あり。檀園は崇禎二年に、齡五十五歳を以て歿せり。此の卷は萬曆四十六年、即ち四十四歳の作なり。檀園の畫は簡素澹逸を以て勝り、其の圖局も亦小景を寫せるもの多し。江山連綿、愈出で、愈妙なること、此の卷の如きは希覩に屬す。紙素潔淨にして墨氣煥發せり。蓋し李畫中の甲觀なり。

王思任書七言絕句立軸

高四尺七寸五分 闊一尺六寸三分 綾本

草書。詩に曰はく

廬老大老是何宗。傳説天開第五峯。一掛一峰峰上坐。五家各出素雲供。

「王思任」に署款し、王思任印、季重氏の二印を鈐せり。瘦筆縱橫。卷舒自在なり。その董玄宰、陳眉公に書名を齊うせし所以を見る。

順治乙酉、清兵南京を陥れ、福王を擒にせり。此の時馬士英、太后を挾んで紹興にあり。季重乃ち太后に上疏して士英を彈劾せり。其の一節に曰はく「士英の頭を斬りて各省に傳示し、以て誤國欺君の戒を爲し、哀痛の詔を下して以て悔悟を昭にしたまは、則ち人心士氣、猶復振ふべきなり」と。又書を士英に致して之を責む。言ふ所剴切悲痛。戟手決背の概あり。曰はく「戰守の事を講せずして、只貪黷の謀を知り、酒色、君に逢ひ、門牆黨を固くし、以て人心解體し、士氣揚らざるを致す。叛兵至れば則ち手を束ねて策無く、強敵來りて而してまづ已走らんと期す。乘輿を播遷せしめ、社稷を邱墟ならしむ。閣下國を謀りて此に至る、即ち喙の長

三尺なるも亦何を以てか自ら解かんや。明水一盂、自刎し以て天下に謝するに若くは莫し。則ち忠憤氣節の士、尙爾く相諒して他無からん。若し但首領を全うせんことを求めば、亦當に立ろに樞機を解いて、之を才能清正の大臣に授け、以て英雄豪傑を召きて呼號惕厲せよ、尙中興を冀望すべし」と。文采書法に於いて季重の名は重けれど、而も其の經世の才、氣節の士たるを説くもの少し。季重の墨蹟を見む者、之を識らざるべからざるなり。

王思任還猿洞詩卷

高九寸 長六尺二寸五分 絹本

往昔北禺峽に洞あり、群猿之に居る。飛來寺の老僧、一小猿を取りて之を飼ひ、玉環を以て之を繋げり。高力士此の處に過り見て之を愛し、携へて京洛に至れり。小猿化して美婦人となり、士人孫恪と云ふ者に嫁し、二子を生めり、後ち孫恪の官遊に従ひて復び寺に至り、老僧を見て玉環を還さんとする。舊侶の群猿、競うて相招く、猿夫人涕淚潸然たり。竟に一絶を賦し、子を抱きて泣別し、衣を裂いて飛んで舊洞に入れりと云ふ。これ劉義慶の記文に傳ふる所なり。後、蘓東坡詩を題し、碑を立てんとして未だ果さざりき。崇禎十五年壬午八月、季重此の所

に過り、五言長篇一首を作れり、此の卷に書する所即ち是なり、全文左の如し。

題禺山還猿洞

昔有一使君。逆旅曾寄宿。不知何念墮。五更作隣犢。就知怖屠刀。得力掙一哭。

脫毛還其身。解蹄仍厥足。今茲峽中猿。偶亦思人欲。遂爲洛士妻。雖孫非類族。

思愛生二子。相好無相續。從夫宦道此。忽憶阮俞竹。隨喜訊老僧。獻環乃碧玉。

老僧已失記。胡爲此徵逐。舊侶競相招。椰掄互默擲。誰謂女無家。本來有面目。

不須慕衰柳。何勞傳膏沐。松風儘受享。水碓大堪浴。久假而不歸。世緣亦迫俗。

袁氏涕潸然。裂衣飛入谷。題詩斬色根。至今堪哀讀。桑扈返於眞。僞人寧作畜。

洞在北禺峽。劉義慶記。有小猿、在飛來寺、甚靈異、老僧以玉環繫之、後高力士過此愛之、携去至洛、而化爲美婦人、嫁士人孫恪、孫饗甚、得婦後頓饒益、生二子、宦遊南海里、依王帥至寺、而歸環於老僧、群猿接之、遂賦一絶、抱子泣別、裂衣飛入舊洞、所謂歸猿洞也、崇禎壬午八月、余從端州歸至寺、清遠朱叔子傳其碑、是近年剔石而出、始知蘓長公題詩、未竟其事也、餘爲點綴數語、以見斬釘截鐵之事反從毛片中有之、時同行友人陸德夫、胡我植、共謂此詩可補坡老之未逮、舟行已過曲江、至凌江之尾矣、我植出絹素索書、因吮毫應之、

歸猿易爲還猿、雖唯之去阿、然終有分金一線、識者能首肯之。 謔菴王思任又題

下に王印思任、季重氏の二印を鈐せり、紹興府志、越殉義錄等を案ずるに、季重は萬曆二十三年乙未、齡二十歳を以て進士に及第せり。是を以て推せば、此の詩を作れる崇禎壬午は、季重正に六十七歳なり、是の後二年にして甲申の國變あり、更に二年後の順治三年丙戌に、季重は食を絶ちて死せり。即ち此の卷は其の歿前四年の作なるを知る。

季重の書名は甚だ重し。特に此の卷は勁拔枯逸を極め、董陳諸公をして色を失はしむるものあり。又小猿の事は頗る吾が邦の「葛の葉」の話説に似て情緒綿綿たり、季重之を叙するに其の暢朗艶麗の詞藻を以てせり。卷を展べて讀過すれば、清韻書味俱に長し。

陳元素自書詩帖軸

高一尺一分 闊七寸八分 粉金箋

陳元素は墨蘭を以て名あり。而して其の詩書の精詣なるは、世之を知らざる者多し。楷書は歐陽詢を法とし、草書は二王に出入せり。此の幅には行楷書を以て七言律詩一首を録し、款に「陳元素と署し、陳金剛印、警訖齋印の二印を鈐せり。其の詩に曰はく

雪罷園林出碧梧。上方樓殿靜虛無。日臨大地氷先落。雲破中天壘自孤。
爛漫此堂人醉散。一雙何處鶴來呼。邀留更待松門月。今夜同君坐玉壺。

鄒之麟怪石松筠圖立軸

高三尺一寸一分 闊一尺二寸九分 紙本

墨畫、奇石老松を寫し。石傍添ふるに一叢の竹を以てす。款識に云はく

婁江陳元龍、以小米陰雨帖、易余黃一峰怪石松筠圖、愛護不翅頭目、後爲祝融所奪、痛慕成疾、予嘉其癖而憫其苦、因遂摸此療之、請作一劑清凉散也。拙庵老逸

臣虎の一印を鈐せり、此の印は蘓嘯民の作れる所なり。下角に三茅道士の一印あり。畫は枯淡にして逸趣饒し。前人衣白の畫を評して「白石翁の氣魄有りて其の逸を得、藍田叔の筆力ありて其の穢を去れり」と云へるは頗る當れるを覺ゆ。書は米南宮の韻致あり。

桐陰論畫に云はく「衣白の畫は子久を法とし、用筆圓勁古秀、皴染多からず」と雖も、一種解衣磅礴の概、卓然大雅不群、其の細密の作は、畫品、雲東、姚公綬、雲卿、莫是龍の間に在り、惜むらくは傳世甚だ少く、見るを得んこと易からざるなり」と。細密の作は論無し、即ち簡淡の作と雖

も亦獲ること難し、雲煙過眼の觀を爲すべからず。

孫奇逢送蓼航先生序冊

高一尺一寸七分

闊八寸五分

紙本

蓼航先生蘓門に歸養するに當り、公卿大夫争うて詩歌を爲りて以て送り、夏峯即ち之が序を作れり。此の冊是なり。楷書、二十三行、無慮六百有餘字、末に「庚子初夏、燕社弟孫奇峯題於夏峯山房、時年七十七歲」と識款し、孫奇逢印、啓泰の二印を鈐せり、冊首に燕趙間人の長方印あり。

庚子は明の永曆十年、即ち清の順治十七年にして、此の歲緬人、永明王を執へて之を清廷に致し、明全く亡びぬ。夏峯は崇禎甲申の變より五公山に隱れ、躬耕講學して、徵辟に應ぜず、以て節を全ふせり。其の學徳俱に高く、名聲世に震へども、墨蹟の流傳せるは甚だ少なく、之を獲んこと尤も難し。夏峯の序文の後に梁清標、胡世安等六家が蓼航を送れる詩を合装せり、皆當時の聞人にして詩書俱に見るに足る。

此の冊は清の宗室盛伯羲 昱の舊藏に係り、伯羲の父輔國將軍恒訓の藏印あり、緘囊の題籤は

亦伯羲の手筆に係る。

黃尊素山水立軸

高四尺九寸

闊二尺三寸六分

綾本

墨畫。山間谿谷の景を寫す。龐豪逸宕にして、尋常畫史の筆にあらず。「芹翁先生正畫、秀水松山尊素」と大字落款し、黃尊素章の二印を鈐せり。藏印三あり。本身の空處に何紹基の小楷題跋あり。其の一節に云はく「平生六法に精し、然も頗る自ら矜重し、小品を以て能を呈するを屑せざりき。惟巨幅の山水は余曾て二三を目觀するここを得たり。皆渾厚古雅にして時蹊を脱盡せり。此の十二幀は尤も興酣得意の作なり。杭城老閱閣の珍藏たるここ二百餘年」と。即ち原十二屏幅なりしを知る。

忠端公は萬曆の季年に於ける六君子の一人なり。逆鑑をして膽を寒からしめたる其の名は史上に炳乎たり。竟に逆鑑の毒牙に斃れしかども、子に清朝一代の儒宗黃宗羲、黃宗炎あり、信に吉人後ありと謂ふべし。語に曰く海を祭るに河を先きにする、乃ち此の軸は十二幀の一に過ぎずと雖も、敢て輕忽に付すべからざるなり。

黃道周答孫伯觀詩軸

高五尺一寸 闊二尺二分

行草書、三行。五言律詩一首。

何處辭吾黨。無生亦道林。野葵尊下體。碧藕剖香心。破瓦因風落。漏舟與象沈。

誰當隻手足。爲掃二陵陰。

「黃道周」款を署して黃道周印、石齋の二印を鈐せり。右方上に未罷堂の一印あり。黃漳浦集（卷四十二）に依れば、此の詩は孫伯觀に次韻せる十首の一なり。刻本には「隻」を「一」とし「二」を「諸」とせり、藏印一あり。

黃道周石城寺詩立軸

高七尺九寸

闊一尺七寸八分

綾本

草行書、三行。七言律詩一首。

闌春木葉已翔風。可有家山入夢中。過此裴徊成恠鳥。何期寥廓問關鴻。

閒將馬革收銅鼓。賣得漁錢贖老翁。脾肉久消何所試。耘鋤未勒短鎌功。

款識に云はく「石城寺諸友過集、錄似屈靜根給諫正之。黃道周」下に黃道周印、石齋の二印を鈐せり。縑素完淨にして、筆法老勁。蓋し石齋真蹟中の神品なり。此の詩は黃漳浦集に載録せず、他日追補の資料と爲すべし。

石齋の草書は跌宕離奇、風起水湧の妙あり。率爾として之を觀れば獨往獨來、依傍せる所無きが如くなれども、諦視すれば仍是れ晉人より變化し來りて別に一格を成せるなり。見るべし。古人の筆墨、必ず據る所あるを。

黃道周書五言律詩立軸

高六尺三寸七分

闊一尺七寸五分

綾本

草書。五言律一首、云はく

開弦時易過。破的手難逢。世事餘今日。人才獨乃公。愁看邸報少。老去客船同。

不識長城馬。曾嘶塞北風。

「黃道周」署款し、下に一鳳五化、黃道周印の二印を鈐せり。右方上に一印あれども印文辨ず

べからず。黃漳浦集には此の詩を逸せり。書法鴻飛鶴舞、人をして覺えず絶叫せしむ。石齋の草書中出色の作に屬す。

黃石齋、倪鴻寶兩公の筆墨は吾が邦の文苑尤も之を珍重し來り、尺幅千金と雖も仍爭ひて之を索む。禹域四百餘州、兩公の眞蹟は爲に稀少を致せりと云ふ。我が邦、本より學を尙び義を重んず。兩公の學徳これに合するものあるが爲なり。余亦其の佳なるものに遇へば、隨手之を收め、敢て値を論ぜず。今藏する所十數件に及べり。蓋し兩公の大節は千古不磨なり。乃ち其の筆墨も亦保愛して之を千歲に不朽ならしむべきのみ。

黃道周泛舟分韻詩卷

高八寸 長七尺五寸 絹本

楷書。五言古詩三首、款題を併せて凡て五十四行。筆意古樸、宛然鍾元常の書を見るが如し。卷首に「壬申秋、同徐振之泛舟分韻、又值振之行急、潦艸成篇、聊存遠證」と書し、卷末に「仲夏望後、書于天方堂中、黃道周」と款識せり。下に「黃道周印、幼平の二印を鈐し、卷前に檀之の二印あり。又二百蘭亭齋所藏書畫印、歸安吳雲平齋審定名賢眞跡の印あり。吳平齋の曾藏に係

るを知る。引首に何紹基の「黃石齋先生詩墨眞跡」の九字あり。又吳平齋の題籤を附裝せり。壬申は崇禎五年にして、石齋齡四十八歲、上疏して罪を獲、籍を削られて民と爲りし時なり。のち都門を出で、山水に放浪し、遂に留都に至り、城隅に寄寓せり。此の詩は則ち此の間の作に係り、宕厲風發、眞に一唱三嘆の概あり。黃漳浦集之を逸せり、倍々以て寶とすべきなり。此の卷縑素完好にして墨色新なるが如し。石齋先生遺墨中の精品なり。

宋漫堂曾て石齋の楷書近體詩の冊に跋して云はく「亡友柳愚谷墳、常に先生の楷書を推し、張瑞圖と並べて太傅の衣鉢を傳へたりと言へり。余急に之を止めて曰はく、信に子の言の如くんば蔡京當に蘓黃米三君子と千古に抗衡し、必ずしも君謨を以て之に易へざるべしと、愚谷爽然自失せり」と、百歲の下、吾亦漫堂に左袒せん。

黃道周九華山詩卷

高九寸七分 長九尺一寸五分 紙本

草書、凡て三十八行。九華山の詩七言絶句六首を録し、「黃道周」と款を署し、下に「黃幼平、道周の二印、右上方に石齋の長方印を鈐せり、又王桐孫、朱玖珊等の藏印十三と別に「菴林審定の

一印あり。即ち梁章鉅過眼の物たりしを知る。此の詩は黃漳浦集之を載録せり。但辭句處處異同あり、孰れが定稿なるを知らず。詩は石齋が崇禎壬申、黃山、白岳、九華、皖臺、匡廬の勝を探りし時の作にして、即ち其の四十八歳の秋なり。書は縱橫奔放、眼中一世を空ふするの概あり。楷書の端嚴なるに比して、別手の觀を爲す。而も審に之を觀れば、此の間一脈の靈犀、相通するものあり、浩放の中に篆隸の意を含み、古趣溢るゝが如し。

此の卷は朱九丹の舊藏に係る、九丹收藏の墨蹟は精品を以て名あり、此の卷、紙素雪の如く、墨光印色と相輝映す、二十年來、觀る所の石齋の草書、是を以て甲觀とす。

黃道周八閩文葉叙卷

高九寸六分 長五尺七寸一分 紙本

楷書。藍絲欄四十五行。端嚴古樸なること鍾元常に似たり。款識に云はく「崇禎乙亥三月、漳海石民黃道周頓首書」。卷前に灑光堂の方印、後に臥寫の葫蘆印と道周、齡比老樹の二方印を鈐せり。乙亥は崇禎八年にして、石齋時に齡五十一歳なり。又澄江の陳氏、錫山の華氏の藏

印あり。一家は皆知名の鑑藏家なり。紙尾の欄外に「榕壇問業」の四字を印刷せり。案するに石齋が漳郡紫陽學堂に在りて榕壇問業を著し、は崇禎七年なりき。翌年その殘紙を用ゐてこれを書せしを知る。特に珍すべきなり。田の四字を香の篆字に改め、今日亦復舊體を燒く。八閩文葉叙は漳浦集卷二十二に見ゆ。今此の卷と對勘するに、字句の異なる所十又一、即ち刻本には第一行の題目に「合選」の二字なく「文葉」を「文業」に作り、第四行の「桐陂」を「桐廬」に作り、第十行の「罌」を「興」に作り、第十一行の「泐」字の下に「閩浦」の二字を脱し、第十八行の「蓋」を「皆」に作り、第二十二行の「怙」を「怪」に作り、第二十七行の「即」を「則」に作り、第二十九行の「柏」を「拍」に作り、第三十四行の「主」を「王」に作り、第四十三行の「君」下に「子」の字を脱せり、是等は皆刻本の誤にして、此の卷に依りて之を訂正すべきなり。

拖尾に平翰、杜文原兩家の跋あり、(平翰の傳は書人輯畧に詳なり)平跋の一節に云はく「黃忠端公の書畫は、明季に在りて已に争ひ重んぜられ、我朝に至りては其の人を重んじ、また其の翰墨を重んぜり。公の節義忠貞、日月に炳耀するを以てなり。即ち小道を以てするも亦大に觀るべきあり。畫を論ずれば倪迂に近く、見るここ罕なりと雖も、而かも收藏家之を寶とす。書を論ずれば晋唐以上に超え、多く機杼を獨出して別に風味あり。當に味外に於いて之を味

ふべし。予が平時見る所は行草甚だ夥し、學者の能く撫倣する所にあらず、固より其の神髓を追ふ能はざるも、即ち形貌も亦之を求めて得易からず、是を以て片金吉羽も人みな寶貴す、未だ時人の翰墨の觀を作すべからず、直ちに商周の盤鼎を以て之を尊重すべし」と。
卷前別幅に曹彦が畫ける石齋黃公待漏圖及び縮臨石齋松石圖を附裝せり。聊か蛇足の嫌あるを免れず。

黃道周書孝經

附大學 首篇 冊

高八寸七分

闊四寸六分

紙

本 計三十六頁

小楷書、孝經二十四頁、大學首篇十二頁、首頁に小隸を以て「孝經今文、附大學首篇、黃道周謹書」と署し、第廿四頁の末に「右經十八章三百二十九句千八百有四字」とあり、次いで大學首篇を録し、末頁に「崇禎辛巳初冬、黃道周書于白雲之庫」と款識して黃道周印、石齋の二印を鈴せり。冊前副冷金箋に大隸書を以て「德産情田」の四字を署し「崇禎辛巳冬日石齋周作」と款識して石齋、黃幼平の二印を鈴せり、即ち石齋五十七歳の書なり。

石齋は崇禎庚辰上疏し、罪を得て江西の詔獄に投ぜられ、同年八月杖せらるゝ、こゝ八十、辛巳十二月に至り、楚の辰陽に謫戍せなれり。其の杖せらるゝ時、血肉淋漓、指節断れんこせしかども、尙能く敗儿に據り孝經を寫し、遂に積りて百二十本に及べり。毎本繋くるに跋を以てし、一語の重複せるは無かりきと云ふ。人一本を得れば侈りて奇寶と爲ざるはなし。此の冊は則ち百餘本中の一なり、石齋嘗て句あり「右手貫鑽左袖書、解鑽書寫尙帶血」と。今此の冊に對して當時の慘況を想ひ、覺えず肅然として襟を正うす。

此の冊は王有齡の舊藏にして毛襄、朱琦等の跋あり、王有齡、字は雪軒、浙江巡撫たり、咸豐十一年、長髮賊の難に殉し、壯愍と諡せらる、毛懷字は士清、意香と號せり、朱琦字は伯韓、王有齡と共に杭州を守り、城陥りて之に死せり、怡志堂集あり。

黃道周書孝經第三十七本冊

高八寸四分

闊五寸三分

紙

本 計二十四頁

小楷書。首頁に「孝經定本、黃道周謹書」と署し闕下完人の一印を鈴せり。凡べて二十四頁、末頁に「右經十八章、三百六十六句、千八百二十七字、第六章有引詩、第九章無則不然、第十三章教以敬也、無其大者乎、是爲定本、崇禎辛巳八月、白雲庫下、黃道周謹再識」と款識して、傍に

「第三十七本」書し、闕下完人の印を鈐せり。

此の冊は即ち獄中に書せし所の孝經百餘本中の第三十七本なり、黃忠端年譜に依れば「石齋貧にして獄卒に贈賂する能はず、獄卒また石齋の清苦を知りて敢て之を望まず、唯紙札を持ち來りて書を求む、石齋爲に孝經を書し以て役錢に當てたり。凡て手書せる孝經百二十本、皆獄卒に持ち去らる、今已に散逸して復見るべからず」と。當時其の一本を得れば皆以て誇り爲せり。獨り孫承澤は二本を得、長跋を加へて以て自ら誇れり。詳に庚子銷夏記に見ゆ。而して三百年後、吾齋二本を收め得たり。翰墨の清福、奚ぞ退谷に遜らんや。

此の冊書法蒼勁醇茂、魏晉の風を具へたり。錢槎の藏印あり、錢槎、字は黼堂、乾隆の内閣學士なり。

黃道周似楊廷麟詩冊

高八寸二分

闊四寸二分

絹 本 計十四頁

小行楷書、五言律詩十首。款に云はく「三宿巖別楊機部、錄似正、黃道周」と、黃道周印、黃幼平の二印を鈐せり。冊首に石齋の長方印あり。黃漳浦集には和楊機部三宿巖四章、三宿巖別賦

似楊機部四章、又別楊機部十三章、凡て二十一首を載録せり。此の冊は其の十首を書せるものなり。

楊機部は名は廷麟、字は伯祥、又は機部、黃道周の同僚にして兵部尙書、内閣大學士等に歴任し、隆武丙戌、福王攜へられしとき難に殉せり。此の詩は崇禎壬午、黃道周が辰陽に謫戎となり、將に發せんとするに臨み、賦して廷麟に示せる所にして即ち五十八歳の作なり。詩は今悉くは録せず、其の二首を左に掲ぐ、

折箐啼不盡。 櫺具笑相看。 數年鷓夷在。 一泓雲夢寬。 鳥知生處樂。 馬識長途難。

可憶漁陽路。 氷城六月寒。

精誠誰似爾。 乾竭一身存。 裏革雖吾志。 還山亦主恩。 半弦關石虎。 千仞墜崖猿。

啓處能無恙。 譚經且在門。

翁方綱、吳大廷、章鋈の三跋、梁印同書、覃溪審定、覃谿鑒藏等の藏印あり、即ち梁同書、翁方綱等名人の收藏鑒賞を経たるを知るべし、題籤は翁方綱の小楷書に係る。

朱繼祚書五言律詩立軸

高七尺八寸

闊三尺

紙本

行草書。丈餘の長條幅なり。詩に云はく

可惜寒梅樹。開臨曲逕斜。蒙茸同翳棘。蓓蕾復瓊葩。竹柏誰爲伴。泥塗祇自嗟。

香風猶爾爾。長傍野人家。

「叢棘中梅花、繼祚」こし、款下に朱印繼祚、宗伯學士の二大印を鈐せり。

朱繼祚は萬曆己未の進士にして、天啓中三朝要典を共修し、崇禎中禮部侍郎南京禮部尙書に歴任し、隆武元年東閣大學士に拜せられ、帝に従つて汀州に至り、事敗れて郷里に奔還せり。永曆二年戊子（即ち順治五年）魯監國閩安鎮に在り、鄰近の州縣多く之に降る、繼祚亦兵を擧げて之に應じ、興化城を攻めて之を陥いる。守ること三月にして清兵大に至り、城破れて難に殉せり。忠節と諡せらる。明詩綜に其の絶命辭を載す。曰はく

嗟予生兮不辰。逢慘禍兮摠身。乾坤崩潰兮陸海爲塵。日星掩曜兮萬象沈淪。人誰無死兮

鴻毛秦嶽。惟其所處兮殤延彭促。且夕畢命兮去將安之。夫妻子母兮不得相依。上告蒼天

兮鑒此微詞。雖爲壘粉兮甘之如飴。千秋萬古兮誰其予知。與化俱徂兮於戲噫嘻。

邦人古へより氣概を尙へり。故に船齋の書畫にも黃道周、倪元璐を始め節士の筆墨尤も多し、

此の軸嘗て加賀前田侯の家藏にして、久しく士道砥礪の資たりしが、轉輾して吾齋に歸せり。繼祚は學問節義の士なり。其の人格の尊ぶべきは無論なるも、單に書道の一科を以て之を視るも、亦堂堂たる專家なり。

黃景昉書五言律詩立軸

高六尺七分

闊一尺八寸

綾本

草書三行。五言律一首。

藜火枉窺臣。蕭蕭一病身。夢嫌鶯稍俊。書感蠹能仁。石髓仙筵閉。牙籤婢錯陳。

犢竿庭曝腹。空咲阮家貧。

「小詠錄似履垣先生咲政黃景昉」こ款し、下に黃印景昉の一印を鈐せり。

景昉は字を太穉と云ひ、晋江の人、明の天啓五年乙丑の進士なり。崇禎十五年詹事となりて翰林に掌り、尋いで禮部尙書を以て東閣に入直し、太子太保を加へられ、終に戸部尙書文淵閣大學士となり。甲申國變の後は家居して出でず、十數年にして卒せり。

靜志居詩話に云はく「相君は務めて陳言を去り専ら新警を尙へり、其の近體は尤も彫繪なり、

侍楚王宴に「隆準衣冠高帝後。彫頤宮闕大江濱」と云ひ、登太和絕頂に「天野星躔包兩戒。國朝嶽瀆視三公」と云ひ、南臺燕集に「仙家閬苑琉璃浦。禹貢揚州篠簜田」と云ひ、贈友に「少從魯國稱男子。家近茅山得異人」と云ひ、壽樊叟に「公餘穉子燒松液。酒半材官舞蔗竿」と云ひ、集北郭艸堂に「誰邀玉佩神仙客。自唱清歌菩薩蠻」と云ひ、答友に「枚叔賦遊梁上苑。伏生書重漢西京」と云ひ、寄友に「以吾一日長乎爾。如此三星粲者何」と云へる如き、要するに沿襲の語を作らず。明詩綜に載する所の三首を讀むに亦此の如し。此の幅の五律も陳套を避けて奇警を努めたる迹歴歴指すべし。黃石齋、倪鴻寶等明季の諸家に此の風多し、亦時代風潮の然らしむる所ならむ。

此の幅の書法。俊勁は王孟津に等しく、偃蹇は傅青主に類し、而も處處黃石齋端嚴の意あり。壁上に掛けて之を望めば、神仙の縹渺たるが如く、殿閣の冠裳を覩るが如し。書法も茲に到りては神趣逸致、遠く繪畫の及ぶ所にあらず。然れどもこれ惟明者と俱に語るべきのみ。景昉の詩書に工なるは世之を識れるもの尠し。今此の幅を見るに、胸裏の奇想、腕底の眞力、明季諸家中に在りて能く之に及ぶものは、數指を屈するに過ぎず。蓋し顯晦の同じからざるは、運會の然らしむる所のみ、以て其の筆墨を高下すべからざるなり。

蔡夫人書

黃道周三近堂銘記

卷

高七寸七分

長九尺八寸

綾本

三近堂は黃石齋の謙居なり。石齋是が記を作り、系くに銘を以てし、蔡夫人書錄せるもの即ち此の卷なり。記は小楷書四十三行、銘は隸書三十三行、卷末に「又以貳月九日、玉卿書於石養山中」と識款し、下に蔡玉卿印、潤石の二印を鈐し、更に其の傍に玉卿、蔡印玉卿の二印を鈐せり。卷前に玉書清操力學の一印あり。

三近堂銘の時款は崇禎甲申五月十三日にして、即ち石齋の六十歳に當れり。蔡夫人の書も亦畧晩年の作たるを知るべし。書は石齋に酷似して靈心獨絶す。年譜に依れば崇禎甲申五月九日、張肯堂、漳寇を平げて歸途、江東の鄴園に過り、石齋を三近堂に訪へり、石齋諸弟子五十三人を會して之を迎へ、奏凱序及詩を作り、酒を置き觴を舉げて其の凱旋を賀せり。事は此の卷の中にも見えたり。後一年にして石齋難に殉せり。滄桑の變、人をして轉だ惆悵に堪へざらしむ。

此の卷は朱九丹の舊藏に係り九丹の藏印數方あり。

蔡夫人書孝經論二則卷

高七寸一分 長五尺七寸八分 絹本

小行楷書、六十五行。末に「明忠烈文明伯武英殿大學士黃道周妻誥封一品夫人蔡氏玉卿書於石養山中」款し、玉卿、潤石の二印を鈐せり。卷首に玉書清操力學の長方印あり、藏印四、中に免牀經眼の一印あり、免牀は吳騫なり。

年譜を案ずるに隆武二年、黃道周難に殉せり。朝議して文明伯を追贈し、忠烈と諡せられき。妻蔡氏を一品夫人に封ぜらる。即ち蔡夫人が此の卷を書せしは、石齋の没後にして其の晩年の作たるを知るべし。書法は石齋に似て秀勁古樸、絶えて女流嫵媚の風を見ず、以て夫人の人となりを想望すべし。閩中の王氏また蔡夫人書孝經論二則卷を藏せり。影本載せて神州大觀に在り、率爾として之を見れば、全く吾齋の此の卷と同一なるが如きも、審に兩者を對勘すれば、明かに別本にして、此の卷の古字を用ゐたること多きは、特に王氏に異なる所なり、孝經論は夫人の尤も好める所にして、之を書せしことも一再に止まらざりしを知るべし。

此の卷と石齋の孝經とは、時を異にして吾齋に入れり。因つて新に一匣を作りて之を併裝せ

り、亦劍合延津の意なり。

張瑞圖山水立軸

高五尺七寸一分 闊一尺六寸六分 綾本

墨畫の長條幅。「崇禎戊辰正月、寫于審易軒、果亭山人端圖」識款し、此子宜置北壑中、張瑞圖印の二印を鈐せり、戊辰は崇禎元年なり。

二水の畫は法を黃大癡に取り。特に骨格の蒼勁と點染の清逸を以て勝れたり。或は其の皴擦に襯貼を缺き、渾淪の致乏しと云ふ者あれども、蕭疎挺拔にして軟甜濃俗の習氣無き所、正

に是士夫の筆なり。二水は天啓の間、奸黨に夤緣して入閣したるの故を以て、士林之を鄙み、其の書畫を愉ばず。然れども單に筆墨を以て論ずれば、明季の諸家に超出し、炳乎として墨林の巨星たり、鑑者思はざるべからず。

張瑞圖 雙軸

枯樹纏藤 平遠山水

高七寸八分

闊九寸七分

金箋

第一幅 墨畫、石坡の上に枯樹藤蘿を畫けり。白毫菴圖と款し、二水、長公の二小印を鈐せり。
第二幅 墨畫、平遠山水。款識に云はく「癸酉秋孟、白毫庵瑞圖作」と、張長公の一印を鈐せり。

癸酉は崇禎六年にして、即ち二水、中晩年の作なり。

二水の畫は皴渲太だ簡にして、筆力挺拔なること當時匹儔を見ず、蓋し亦畫苑の驍將たるを失はざるなり。葉德輝の觀畫百詠に二水を論じて云はく「もし書畫を云は、誠に明季諸家に超出す、其の名節をして自矜せしめば、豈黃忠端、倪文貞、祁忠愍の諸公と光を日月に争はざらんや。而るに乃ち心を富貴に薰し、詞林を玷辱し、孔雀の文章、流れて口實と爲る、惜まざるべけんや、懼れざるべけんや」と、二水の書畫を觀む者は、其の人を捨て、其の筆墨を取るべきのみ。

張瑞圖南湖洞庭詩立軸

高十尺二寸五分

闊二尺二寸八分

絹本

行書。七言絕句二首。

南湖秋水夜無煙。耐可乘流直上天。且就洞庭賒月色。將船買酒白雲邊。

洞庭湖西秋月輝。瀟湘江北早鴻歸。醉客滿船歌白紵。不知霜露入秋衣。

「瑞圖書」と款し、下に張瑞圖印、文章學士の二大方印、右方上に審易軒の長方印を鈐せり。

此の書は屈折槎枒、必ずしも雅觀に愜へりこと云ふべからず。然れども數寸の大字、丈餘の巨軸、世罕に觀る所にして、これを大堂に掛けて遠く望むに、魄力雄偉なること人を壓するものあり、棄つべからざる所以なり。眼福篇に、天啓丙寅、西湖畔に魏忠賢生祠を建て、施來鳳、文を撰し、二水書丹を爲りし事を引きて云はく「晞髮軒は東湖に在り、乃ち謝皋羽が文信國を哭せし所なり。鐵如意を以て節を擊ちて正氣歌を讀み、後遂に晞髮を以て其の集に名づけたり、二水書を作る時に當り、亦信國の孤忠と皋羽の高義を念へりや否や、二水をして書に工ならざらしめば、今日尙其の名を知るものあらんや」と。今日二水の名の傳はれるは、其の人物にあらずして、其の書に因れること洵に此の説の如し。

張瑞圖書七言絕句立軸

高九尺二寸

闊一尺八寸五分

紙本

草書。詩に曰はく

虎溪閒月不相過。帶雪松枝挂薜蘿。無限青山行欲盡。白雲深處老僧多。

「瑞圖」署款し平等居士、張瑞圖印の二印を鈐せり。

邦人の瑞圖が書を玩ぶ者、みな槎枿屈折なるを以て其の本色とせり。而して流傳する所の墨蹟、亦此の種ならざるはなし。然れども是晩年頽唐の筆にして、脾氣殊に甚しく、吾儕未だ其の尙ぶべき所以を知らざるなり。此の軸は其の未だ魔道に陥らざりし時の作に係る、岸偉にして而も姿致あり、剛勁にして而も流暢なり、果して大家の及び易からざるを見る。

愛日吟廬書畫錄に瑞圖の書を論じて云はく「明季は行草に工みなるもの多かりき、其の最も著はるゝもの亦十家を下らず、各一境を具せり、果亭は翻筆を能くし、方折に工みなり、故に猛厲の勢、萬夫を辟易せしむ、中國盛んに董書行はれて後、此の法傳はらず、而して東瀛の人頗る其の法を習へり、故に東人之を球璧視し、毎に懸金を以て購ひ、脛無くして走る、吾は恐る數十年後、此の幅を求めんと欲すとも亦得る能はざるを」と、洵に此の言の如く、邦人二水の書を好めること久し、道聽途説の輩は、今尙其の巧拙を論ぜず、艶稱して已まざれども、具眼の士は既に其の晩年屈鐵の書を喜ばず、蓋し人情日に移り、好尙年と共に變ず、脛無く

して走るものは、今はそれ欵側贅牙の書にあらざるなり。

張瑞圖書唐詩卷

高九寸三分

長二十尺二寸五分

紙本

草書、唐人詩七律三首。「一水」署款し張印瑞圖の一大方印を鈐せり、文經堂書畫記、宮溪周氏珍藏等の藏印あり。「一水」は初め晋唐を學び、造詣頗る深く、後一變して別に旗幟を立てたり。此の卷は其の未だ變ぜざる時の書にして、流麗秀勁、轉折自在、彼の晩年の欵側硬頑、字字屈鐵の如きものに比すれば、韻致殊に饒きを覺ゆ、梁聞山の評書帖に云はく「瑞圖の行書は初め孫過庭書譜を學び、後、東坡の草書醉翁亭を學べり、明季の書學、競うて柔媚を尙ひ、王鐸張瑞圖一家、力めて積習を矯め、獨り氣骨を標せり、未だ神に入らずと雖も、自らこれ不朽なり」と、王張一家、吾は其の人を喜ばず、而も書を以て論ずれば、竟に明季掉尾の大家を以て許さざるを得ざるなり。

王建章臨松雪道人群驥圖橫軸

高一尺六寸六分 闊二尺七寸三分 紙本

著色畫。水邊に枯樹衰柳紅葉を寫し、下に群馬十八を畫けり。立てるもの、臥せるもの、奔れるもの、塵に滾ぜるもの、泉に飲めるもの、縱横滿幅、一の雷同せるは無し。款識して云はく「松雪道人群驥圖、藏泰州春雨草堂、偶臨此本、未能神似也、王建章」云、即ち子昂を臨せしなり。下に王印建章の印を鈐せり、又宮本昂の藏印四、及び賢者而後樂此の一印あり。宮本昂は明末、秦州の名家にして堂號を春雨草堂云へり。硯田曾て此に客たりき。故に其の眞蹟、宮氏に藏せしもの甚た多し、而して出で、世に流傳せるも往往之有り。此の軸亦其の一なり、も宮氏の姻戚廉南湖の小萬柳堂に藏たりしが、南湖東遊の時、携へ來りて竟に吾齋に入れり。余曩に北京の顔氏世清所藏の趙子昂群馬圖卷を見たり、紙本、設色、描法傳彩、此の軸と全然相均し、而して神韻は此の軸却て優れるを覺えき。硯田は自ら謙抑して「未能神似」云へりしも、吾は是を出藍の作と謂はんのみ。

硯田は天分高く、功力亦深かりき。其の作品に就いて之を見るに、勁挺渾厚なるものは沈石田に類し、巧緻精妙なるものは文徵仲に迫り、洵に卓然たる大家なり。吾が邦に在りては、賴山陽嘗て其の李韜問道圖を激賞してより、聲價頓に昂り、苟くも繪事を解する者は、硯田の名を

知らざるはなし、而も一たび之を華人に問へば、茫として答ふる所無く、著録亦多く載する所無し。想ふに硯田の生地なる福建泉州は、文雅風流の中心を距ること遠く、且明末擾亂の時に當りて、南北の隔絶、殊に甚しく、硯田の名は遂に郷境を出でずして止みしならんか。人の顯晦は數あり、雖も、若し硯田をして、杭蘇の間に生まれしめたらむには、恐くは文沈唐董の諸公と齊馳并駕して、雄を一世に唱へしならん、今此の群驥圖を觀て感慨殊に深し。

吳山濤書七言律詩立軸

高五尺一寸三分 闊一尺六寸三分 綾本

草書。七言律一首。曰はく

金勒連鑣共擷芳。石欄姚魏已胎黃。絲抽蛟室氷簾滑。竹護龍孫玉筍香。
匏葉檜明搖綵勝。上泉春及謙華堂。革鼉社鼓村村急。木末秣榮向豔陽。

八音詩、和同社韻、書似允老年道兄正之、 吳山濤

下に吳印山濤、岱觀父の二印を鈐せり。

山濤は字を岱觀、號を塞翁云ふ。明の崇禎間の舉人にして、嘗て成縣に令たりしが、致仕後

は吳山に住して此に歿せり。書畫を善くし又詩に工にして塞翁集あり。其の詩は世に傳誦せらる、もの多きも、墨蹟は太だ鮮し。余年來見る所僅に數件に止まる。特に大幅は最も稀遺に屬す。

程邃石流溪樹圖立軸

高三尺七寸七分 闊一尺五分 紙本

墨畫。夏景山水を寫せり。題に云はく

石流寒映日。溪樹密垂陰。赤日永到地。故人椽上心。好句忽衝口。清風時汎襟。

久虛洞庭約。理棹待秋深。 垢道人程邃

程邃、穆倩の二印を鈐せり。

道人の生年月は諸書未だ之を詳にせざれども、其の畫山水に辛未八十七歳の時款あるものあり、辛未は康熙三十年なれば、即ち道人の生年は、萬曆三十三年乙巳なるを知る。秦祖永は程邃の畫を評して云はく「穆倩の山水は純ら枯筆を用ゐ、模糊蒼鬱として別に神味を具せり。余卷冊數種を見たるに、規格悉く巨然を倣へり。但諸家の巨然を倣へるは、多く潤

筆を用ゐたるに、此は獨り渴筆を以て、一種沈鬱蒼古の趣を出だし、迥に人のごこくならず、洵に是畫中の逸品なり」と。

程邃巖山圖立軸

高四尺七寸五分 闊一尺七寸五分 紙本

淡著色畫。秃筆を以て巖巒嵯峨の狀を寫し。多く樹木を着けず、惟山石の堆疊せるを見る。皴

法亦尋常見る所と同からず、頗る奇俊を極む。款なし、程邃の二印を鈐せり。上方に王環山、

羅春圃各七絶三首を題せり。春圃は曾煥の詩を代書せるなり。識して云はく「賓谷先生素本

工書、因新納寵、不能作字、囑春圃代書」と。賓谷の閩福亦羨むべきなり。

武林許氏珍藏、宮氏農山思無邪齋圖書、遠駿珍藏、吳伯榮氏秘笈之印の四印あり、即ち宮爾鐸、

吳榮光等の舊物たるを知る。

畫徵錄に云はく「邃は品行端慤にして敦く氣節を崇び、漳浦の黃公道周、清江の楊公廷麟に従ひて遊べり、談論する所は皆國家の急要なりき、其の後秀水の曹侍郎溶と維揚に遇ひ、長歌を作り以て贈れり、感慨悲懷俯仰に勝へず」と。乃ち垢道人は風流一途の人にあらずして懐

慨氣節の士たり。勝朝の遺老を以て終へき。河山既に改まり城郭皆非なり。此の軸の畫境に依りて之を想ふに、穆情は畫を藉りて以て胸裡の鬱屈を洩らせしに似たり。

藍瑛枯木竹石圖立軸

高四尺四寸

闊一尺五寸八分

紙本

墨畫。乙酉冬日、畫於西溪之亦亦山齋、蜨道人藍瑛識款し藍瑛之印、田叔の二印を鈐せり、乙酉は順治二年にして田叔六十一歳なり。

藍瑛松石蘭竹圖立軸

高四尺七寸五分

闊二尺一寸三分

紙本

淡著色畫。石頭陀藍瑛畫於東皋培本堂、時年七十有三、識款して藍瑛之印、田叔の二印を鈐せり、風神掬すべし。

藍瑛倣北苑山水立軸

高五尺五分

闊一尺八寸七分

金箋本

淡著色山水畫なり。甲子夏仲、倣北苑畫法於夾溪柳岸之層樓、錢塘藍瑛識款し藍瑛之印、田叔の二印を鈐せり。甲子は天啓四年にして、田叔四十歳に當る、田叔は初め董巨を習ひ、晩年に至りて別に一格を作せり。此の軸は北苑を倣へる盛年の作にして蒼潤絶倫、田叔の逸品なり。

秦祖永は田叔の畫を評して「林木山石、均しく獲悍の習氣あり、是等の筆墨、如し能く渾融柔逸の氣を以て之を化せば、何ぞ嘗て文沈諸公と勝を爭ふべからざらんや」と云へり。是未だ渾柔、此の軸の如きを見ざりしが故のみ。葛景亮は田叔の倣梅道人金箋山水小幅を獲、これを愛日吟廬書畫錄に載録して曰はく「田叔の倣古は多く北宗に在り、その間、南宗に及べるものは其た、元の四家か、是の幀は吳仲圭を法せり、吳の鉤皴は本より斧劈を以て披麻を帶べり、田叔は性情に湊合して加ふるに圓點を以てし、渲するに水墨を以てせり、安んぞ神似せざるここあらんや、故に其の生平作る所は倣吳を多しと爲す、此は金箋上に在りて墨采尤も勝る、幸に東瀛人の見る所ならず、然らずんば視て奇貨と爲さん矣」と。田叔の畫は吾が邦に於いて特に重んじ、舶齋する所亦尤も多し、然れども概ね北宗の手法に屬し、祖永の

所謂獷悍の習氣あるものなり、その心目に浸淫せるの久しき、人多くは之を以て田叔の本領なりとし、別に靈腕の存するあるを知らず、適ま其の董巨を追蹤し、吳黃を師法せるものに遇へば、直ちに目して斐旻の虎を爲す、東瀛尙此の輩多し、葛君意を安んじて可なり。

藍瑛白岳喬松圖立軸

高六尺二寸四分

潤三尺一寸九分

絹本

著色畫。左方上に隸書にて「白岳喬松」の四字を署し、行書にて「泰昌元年、虎林藍瑛畫」と款識し、藍瑛之印、藍氏田叔の二印を鈐せり。泰昌元年是田叔三十六歳なり。青綠紛華、煙雲卷舒の狀、精妙を極む。

畫徵錄に云はく「畫の浙派あるは戴進より始まり、藍瑛に至りて極む爲す、故に識者貴はず」と。これ至論と云ふべからず、田叔の畫、浙派の法を用ゐて麤獷の厭ふべきあるは否むべからず。然れども是れ田叔の半面に過ぎず、其の出色の作に至りては神完く氣足り、宋元人と血戰するに足る、即ち居然たる南宗の大家なり。未だ其の片隅を捉へて一概に抹倒すべからざるなり。

藍瑛仕女立軸

高三尺七寸三分

闊一尺二寸八分

絹本

著色畫。紈扇を手にして佇立せる仕女なり。運筆は疎密相適ひ、傳彩亦瀟灑にして、能く清婉優雅の致を盡せり。「戊午秋七月傲古、蜨叟藍瑛」と款識し、藍瑛之印、田叔の二印を鈐せり。田叔が人物を能くせしことは、著錄之を言へども、其の傳世のものは極めて希なり、戊午は萬曆四十六年なり、田叔の生年月は記録の之を詳にするもの無しと雖も、古緣萃錄に載する秋山紅樹圖の款識に「己亥春王月、畫於吳山大觀閣、石頭陀藍瑛時年七十有五也」とあり、己亥は順治十六年なり、田叔此の時七十五歳なりとすれば、其の生年は萬曆十二年乙酉なり、之を以て推算するに、此の軸は其の三十四歳の作なり。

世人動もすれば、田叔の筆墨を目するに卑俗を以てするものあれども當らず、今此の軸を見るに風神楚楚として筆端仙氣を具ふ。龔芝麓嘗て陳章侯の畫仕女に題して云はく「冶工而入逸、脫去脂粉、獨寫性情、乍凝睇以多思、亦含愁而欲語、徘徊想似如矜如疑、即其間芳草無言、裙香暗展、石影映珊瑚之骨、蘭風浮玉腕之香、點綴舊幽、令人魂消心死、而況攬翠蛾于臨鏡約

繡帶于合歡者耶」云。これを移して此の圖の評に充つとも、亦不可なきを覺ゆ。

藍瑛江皋話古圖立軸

高五尺六寸一分 闊一尺六寸四分 紙本

淡著色畫。危巖老樹の下に二老對話し、江を隔て、遠く數峯の聳ゆるを見る。款識して云はく「江皋話古、關同畫法、辛卯清和、藍瑛師其意於醉李駕湖舟中」云。下に藍瑛之印、田叔の二印を鈐せり。辛卯は順治八年にして田叔時に六十七歳なり、此の圖關同を倣へり云へども、峻峭の筆は是田叔本來の面目なり。

藍瑛觀世音菩薩像立軸

高四尺二寸六分 闊一尺六寸八分 紺紙本

紺紙に金泥を以て巖上趺坐の觀音を畫き、前に合掌禮拜の一童を配す。右方下に「崇禎丙子春二月朔、弟子藍瑛敬畫、百幅之十二」云款識し、藍瑛、田叔子の二印を鈐せり。上方に陀羅尼經一節を書せり、孫竹癡杖の筆にして、「丙子佛成道日、住林漫士杖和南書」云款識せり。

田叔の人物畫は之を山水に比すれば、傳世極めて尠く、特に紺紙金泥の如きは、絶無稀有にして尤も珍ごすべし。手法を案ずるに、顔面頭髮は細筆を用ゐて莊嚴慈悲の相を現し。衣褶は疎筆を以て鈎勒し、清挺蘭葉の如し。近世人畫く所の觀世音の動もすれば、庸俗に陥れること全く其の觀を異にせり。畫徵錄に謂へる「田叔は晩に乃ち自から一格を成し、偉俊老幹、尤も大幅に長じ、兼ねて人物花鳥梅竹に工にして名、時に盛なり」云は果して所由あるを知る。時欸の丙子は崇禎九年にして、田叔五十二歳なり。

陀羅尼經を書せし孫杖は字を子周、號を竹癡といひ、書畫俱に之を能くし、當時の聞人にして又田叔が詩酒の友たり、書法遒勁超逸、陳老蓮の風あり。

田叔嘗て子周孫杖在之、吳令等諸友と俱に海棠を莫愁湖邊に探り、將に其の所に達せんとして田叔事に阻まれ、獨中途より歸る、明朝子周を訪へば、子周既に海棠一枝を畫き、題するに詩を以てせり、田叔見て昨遊を想ひ惆悵に勝へず。乃ち子周の韻を次して亦一律を作れり。時は天啓二年壬戌なりき。愛日吟廬書畫錄に載する所の「孫杖吳令藍瑛詩畫合軸」即ち是なり、其の事は此の觀音像と直接の交渉無しと雖も、亦以て藍瑛二子の當時の交情を見るに足るものあり、依て其の詩を左に録す。

春城折得海棠、分寄楊山圖、山圖以詩見謝、賦此奉訓、且爲卽事記、是日同乞花者、有金伯涵、吳公孫、顧仲章、孫從周及叔遠兄并在之俱在焉、在之復以手中花、易我心上畫、畫就、總書出之、若使藍田叔見此、當不默然也。

畏□春色鬧紛紛。靜鎖朱門屈夕曛。樹隔簾橫無限意。梯攀剪折不辭勤。君憐輕媚裁詩謝。我會深情借豔分。自惟酒狂多性習。呼朋挈伴亂如雲。

壬戌上巳後一日、懶人孫杖

孫子周於湖上、見惜春人携海棠一樹、嬌情艷人、隨其荷花者、步盡長堤、尙不能撇、詢其花主、卽里中姻屬家、次日偕同社、往探培處、從女墻往之、將逼其所、余忽牽他事趨歸、惆悵無緣、可想見矣、次朝過秋室、子周早已墨染是花、肖其神、比興之句題成就矣、余隨觀隨誦、復隨問昨乞漿何事、社中咄咄道趣、令我垂涎、語不及再問矣、因步前韻、自解煩惱云。

莫愁春去亂紛紛。花露墻頭稍帶曛。引却蜂兒窺綽約。惹教燕子暗殷勤。忽將朱戶深深閉。欲折繁枝箇箇分。自咲尋芳先獨返。空令惆悵佇行雲。

藍瑛、似在之社弟正之

藍瑛做趙子昂蘭石卷

高一尺二寸六分

長十二尺四寸

紙本

墨畫。叢生の蘭に配するに秀石小竹を以てす。意趣閑遠、風神人を動かす。款識に云はく

浙中産蘭唯越嶠、秀而久馨、筆墨寫生、獨吳興趙文敏公酣暢於法外、偶於靜甫辭兄齋頭譚及、作松雪齋求之鑒定、壬申春王月人日、西湖外史藍瑛

藍瑛之印、田叔之印の二印を鈴せり。壬申は崇禎五年にして田叔四十八歳に當れり。

田叔は山水の専家にあらず、殊に人物花鳥蘭竹に長ぜしは、惟著録之を言ふのみにあらず、傳世の眞蹟悉く之が左券たらざるなし、但筆致の超脱せる此の卷の如きは、特に罕覩に屬するのみ。此の卷曾て廠肆に在り、人の之を顧る者無かりき。余偶然過り見て驚喜し、重價を投じて購ひ歸れり。美人を沙吒利に救ひ得たるは、亦文墨の宿縁ならん歟。

藍瑛西溪雨霽圖卷

高七寸六分

長十一尺五寸五分

絹本

墨畫。梅道人手法を用ゐたり。卷末に款識して云はく

乙酉春王、小隱西溪棹塢、久雨初霽、甚覺神爽、同老衲、策杖閑步溪頭、見飛瀑爭流、野雲未散、衲云、好一幅大畫、我兩人都畫中人矣、余云、非人在畫中、還是畫在手裏、相對大咲、歸法
梅花和尚以紀、鯉叟藍瑛。

下に田叔子の一印を鈐せり。乙酉は順治二年にして即ち田叔六十一歳なり、蒼莽峭勁にして而も獷悍の氣無し、字亦甚だ佳なり。

藍孟傲黃大癡山水立軸

高六尺八寸八分 闊一尺五寸三分 綾本

淡著色畫。乃父田叔の家法自ら備はれり。款識に云はく

甲辰冬日、同友人、正觀一峯老人溪山不盡圖、值宗翁書來索畫爲老大人九十壽、遂法其意、
李過庭所謂偶然者也 西湖藍孟

藍孟之印、次公の二印を鈐せり。甲辰は康熙三年なり、即ち次公晩年の作に係る。

次公の畫を評せる者は曰はく「運筆は甚だ適勁ならざれども、邱壑鬆脆、之に對すれば冰梨雪

藕を見るが如く、唇吻俱に爽なるを覺ゆ」と、まさに此の軸の爲に云へるもの、如し。

錢龍錫書七言長篇立軸

高五尺七寸六分 闊一尺五寸五分 絹本

草書、五行。詩に曰はく

吳江霜落楓葉丹。僊人贖鶴來雲間。金璫玉佩聲珊珊。云是紅蓮幕底邊。

瓊漿滿酌渥朱顏。滄海桑田日月閒。佐郡參陪五馬班。神駒汗血驅塵寰。

朱梨火棗西出關。清影妙舞雲霧鬟。芙蓉十里高可攀。三千弱水長潺湲。

玉皇矧將鸞誥頒。銀緋茱纈光爛斑。參天松柏盈砌蘭。鳳凰山比玉融山。

款に云はく「治通家侍生錢龍錫拜賀」と、下に錢印龍錫の一印を鈐せり。

崇禎三年、機山が毛文龍の事に坐し、罪を獲て詔獄に捕はる、や、黃石齋道周中夜疏を草し、闈を排し闈を叩いて機山を營護し、翌年五月に至るまで三たび上疏し、機山初めて釋さる、を得たり。石齋の大解網の詩、及び送錢機山解縛出都四章の五言律は、此の時に成れり。余は石齋の遺墨を藏すること久し、今また機山の手蹟を收む、書畫若し靈あらば、一堂の下に相逢

うて剪燈話舊の情に勝へざるべし。

方震孺書七言律詩立軸

高六尺三寸

闊一尺七寸二分

綾本

孩未は明末社稷困頓の時に當り、入りては侃諤の議を悉し、出でては討勦の功を立つ。其の廣西巡撫たりし時、京師陥り、福王南竄す、孩未即日拜疏して曰はく「諸臣自ら夾日の勦を高しとす、微臣終に攀髯の痛あり、願はくば一旅を提げて賊を一決せん」と。而も姦臣馬士英等の阻む所となりて事行はれず、竟に憂憤嘔血して卒せり。其の忠烈千古に灼耀す。

此の軸は行草書、七律二首を録せり。詩調雄偉、筆法老勁、目のあたり孩未其の人に接するが如し。

白狼山勢古來奇。吏部文章世所師。一艇煙霧鷗鷺長。三朝踪跡鳳麟知。

駐顏藥餌留姜桂。漸老松杉更羽儀。何日涓濱天子獵。後車猶少念年期。

問余何事長于駐。少伯眞堪學耦耕。已醒鹿蕉寧作我。未馴龍姓獨餘鄉。

時分粳米開塵甑。閒看流雲譜世情。斟酌訪梅山寺遍。春衫載酒又新鶯。

「小詩奉贈異翁老先生盟長併求教定、弟方震孺具草」と款識して孩未子、震孺之印の二印を鈐せり。

孩未の詩は朱竹垞の該博を以てしてすら、其の明詩綜に載する所只七律一首のみ。今一幅の中に二首を得たり、聊か以て誇るに足らむ。

瞿式耜論疏卷

高九寸九分

長十尺七寸五分

紙本

行書、六十三行。奏疏の事を論ぜり。款を署せず、瞿式耜印、浩劫餘生の二印を鈐せり。狄學耕、鄭孝胥、岳瑞の跋あり。

稼軒は國步艱難の時に當り、黃石齋、倪鴻寶等と同じく學德世に高く、忠節國に殉せり。千歳の下、人皆其の遺烈を瞻仰せざるなし、而して石齋鴻寶の遺墨は、傳世必ずしも尠しとせず、惟稼軒の手蹟に至りては、之を獲ること甚だ難し。此の卷は曩に上海狄氏平等閣の收藏に係り、稱して海内の孤本と爲せり、書は則ち沈着莊重、文は則ち憂國愛君、洵に筆墨と人物と相映發して千載に炳耀するに足る。

倪元璐壽張湛虛詩立軸

高五尺四寸

闊一尺四寸八分

絹本

草書、三行。七言絕句一首

剛是屠蘇得歲時。春新花氣滿城知。只看今歲家家醉。可少南山酒一卮。

「元璐」款を署して倪氏元璐、太史氏の二印を鈐せり。右方上には是爲列朝之儒の一印あり、佳蹟なり。

倪元璐夾溝馬上詩立軸

高六尺五分

闊一尺五寸六分

綾本

行草書三行。五言律詩一首

舍舟而就陸。譬若解連鷄。野外山綿叢。花間鳥滑稽。脇驢當不借。陷酒入偏提。汗漫亦殊樂。誰爲七聖迷。

「元璐」款を署し倪印元璐、太史氏印の二印を鈐せり、藏印三あり。

李佐賢の書畫鑑影に載する所の戊辰春詩幅、現に京地某氏の藏に歸せり、之を見るに筆意此軸と全く姉妹の如し、蓋し同年の作ならん、戊辰は崇禎元年にして、鴻寶時に三十六歳なり。

倪元璐書五言律詩立軸

高六尺七寸

闊一尺四寸九分

綾本

行草書。詩に曰はく

辨此非尋俗。文心與賦才。神軍俄鳴節。侯管忽飛灰。風有若號者。蟲生名怪哉。小消蛙腹脹。正爾慮蚨回。

「元璐」款を署して倪印元璐、太史氏の二印を鈐せり。字體瘦老、蓋し晩年の作なり。鴻寶の書その形貌屈鐵の如くなるは、張二水晩年の字に類たる所あり。然れども二水は徒に硬頑欵側にして、鴻寶の宕落離奇、大家の風度あるが如くなる能はず。鴻寶と二水は其の人固より日を同うして議すべからず、即ち書を以てすとも兩者の後先、多言を要せざるのみ。

倪元璐滿市花風詩立軸

高五尺五寸

闊一尺五寸六分

絹本

行草書。五言律詩一首

滿市花風起。平堤漕水流。不堪春解手。更爲晚停舟。上埭天連雁。荒祠水蔽牛。

杖藜聊復爾。辭哂多陽游。

「元璐似樂山詞丈」款し、下に倪印元璐、太史氏の二印、右方上に□在雲漢山間の印を鈴せり。

倪元璐題畫詩立軸

高六尺二寸九分

闊一尺八寸二分

綾本

行草書。七言絕句一首

山情澹得似沙鷗。又着松吟雨後秋。無事僑來此靜坐。不知眞覺日長不。

「題畫似景峯年辭兄、弟元璐」款し倪印元璐、太史氏の二印を鈴せり。左方下に朱氏九丹審定の印あり。

倪元璐書五言律詩立軸

高五尺四寸二分

闊一尺五寸五分

絹本

行草書。詩に曰はく

默坐無絲掛。化余爲水鷗。山頭望廷尉。壁上觀諸侯。夢境咄嗟辨。文心汗漫游。

初知佛快樂。不在度人籌。

「默坐有作、元璐」款識して倪印元璐、太史氏の二印を鈴せり。此の軸本邦に舶來せしは尤も舊く諸家の題詠十數に上る、別に裝して一卷と成せり。

倪元璐僧房題壁詩立軸

高五尺一分

闊一尺四寸六分

綾本

行草書。七言絕句一首

僧厨沸酒百蚊飛。雙棗沈茶紫繭微。酒罷書橫依舊睡。夢作蝴蝶別花歸。

款は「元璐」署し、印は倪印元璐、鴻寶氏の二方を鈴せり。詩書超妙、二美具はる。

鴻寶の書は風骨稜稜たること其の人の如し、特に此の軸の草書は、遒勁の中に清麗の致あり、

所謂る宋廣平、鐵心石腸にして而も賦性獨り冷艶なるもの即ち是なり。

倪元璐尺牘卷

紙本

尺牘六幅。每幅廣狹同じからず、四幅は草行書、二幅は楷書なり、第六幅に「中秋日、弟璐頓首、環瀛先生」と款識せり。拖尾に朱琦、余應松、廖鼎聲の跋あり。朱跋の一節に云はく「公は平生妄に交らず、獨り祝環瀛先生と交最も篤かりき。其の後裔、藏する所の公の手札最も多し、言へる所は皆君國の大計にして私に及ばず。益々嘆ず公の忠誠は不朽に垂るべきことを」と。朱琦は髮賊の亂に王有齡と共に杭州を守り、城陥りて難に殉せり。此の人にして此の卷に跋せるは偶然ならざるなり。

顏廷榘梅花嶼四詠卷

高九寸三分 長十八尺一寸 紙本

草書。卷首に「梅花嶼四詠」と署し、次いで左の四首を書せり。

傲睨樓

纔脫朝簪便衣荷。登樓傲睨總煙波。已知機息鷗群近。自覺湖寬秋色多。

一葉扁舟天上渡。孤山獨鶴月中過。遊人不是悠悠者。來濯滄浪共嘯歌。

北山居

故人獨臥北山居。猶是當年舊艸廬。湖上尋梅曾有賦。花邊垂釣豈因魚。

逋僊住處元隣舍。觀察歸時好著書。寂歷園林雲水畔。移文那復到樵漁。

醉竹樓

樓外森森竹萬竿。樓中日日報平安。北窓影亂琅玕碎。六月陰凝枕簟寒。

酩酊不辭連夜醉。婆娑眞爲主人歡。步兵自是風流曹。對客何妨倒著冠。

浩歌亭

抱膝浩歌天地間。百年贏得此身閒。羊腸路曲應回駕。廡角風清只在山。

空際浮雲從自卷。林間飛鳥早知還。此聲欲和非今日。把酒相看發咲顏。

款識に云はく「梅花嶼在西湖之北、乃張觀察望湖先生別業也、予過武林、觀察公邀集嶼中、爲賦四詠、用紀厥勝、是日舟中晴暖、援筆漫書、奉呈予林丈大雅、博咲、顏廷榘」云。後に桃源洞口漁人、江州司馬の二印、卷首に小山叢桂の一印を鈐せり、玉芝の藏印あり。

顔延築字は範卿、永春の人、嘉靖戊午の歳貢にして、九江府通判となり。當道に忤らひて岷府長史に遷さる。詞翰を以て時に名あり。燕薊吳越の間に縦遊し、齡九十三を以て歿せり。其の筆墨は流傳するに極めて稀なれども、吾が國には夙に之を舶齋し、米庵の小山林堂圖録にも、其の行書五律立軸を載録せり。此の卷はも高松の某家の收藏に係り、後、黒木欽堂の有に歸し、丙寅の歳、欽堂の遺品を出售するに當り、收めて吾齋に入れり。當時陳道復の書卷亦在り、之を此の卷と較ぶるに、道復は醉翁の如く、範卿は老僧に似たり。各各別趣を具ふれども、若し古勁適逸を以て論ずれば、範卿固に道復の右に出づ。而も道復は高値を以て人に購ひ去られ、範卿の此の卷は之を顧るもの無かりき。天下耳食の徒多きは、今も古に異ならず。爲に一噓を發す。

鄭露山居圖立軸

高五尺二寸三分

闊一尺七寸一分

綾本

墨畫。縑素稍黯きも墨瀋なほ淋漓たり。縱横の筆端に古法を籠蓋し、作家の習氣を擺脫して、士夫の豪懷を發露せり。草書款題に云はく

人間爲何事。筆墨俱生涯。驚覺前宵夢。山中買我家。

倪老年兄正 鄭露

下に鄭露印、湛若の二印、前に我思古人の二印を鈐せり。下角に藏印一あり。

鄭露は字を湛若と云ひ、南海の諸生なり。永明王の下に中書舍人となれり。壯年には汪洋自恣、好んで大言壯語し、以て其の牢騷不平の氣を洩らせり。然れども時に或は清談寬態、東晉人の風旨に倣ひ、到る處輒ち一座を傾倒せしむ。詩を能くし畫を善くし、特に大小篆八分書に工なり。少くして阮大鍼に師事し、曾て阮の爲に咏懷堂詩に序せり。阮が東林を羅織するに及びて、書を貽り交を絶ちぬ。居常才畧を以て自負せり。海内多事なるを見て騎射を學び、嘗て馬に跨りて門を出で、南海縣令の行轅に衝りて拘へらる、則ち微吟して曰はく「騎驢適值華陰令。失馬還同塞上翁」と。是より亡命して廣西に之き、其の山川風土儀物を視、歸りて赤雅一篇を撰せり。家に藏眞の墨蹟を蓄へり、嘗て香山に何吾騶を訪ひて之を示す、吾騶見て愛玩已まず、因て歸るに臨み脱して之を贈れり。既にして大に悔ひ、舟を返して香山に抵り、吾騶の堂に升り、自ら梁上に縊らんことを、吾騶驚きて卷を還し、纔に事無きを得たり。湛若又二琴を藏せり。一を南風と云ふ、宋の理宗の宮中の物なり。一を綠綺臺と云ふ、唐の武德年製にして康陵の御前に彈せし所なり。廣州城陷るに及びて、湛若尙柱に倚りて琴を鼓し、兵に双

せられて琴を抱いて死せり。

湛若の筆墨は夙に邦人の鑑賞に入り、支那本土よりも寧ろ之を本邦に見ること多し。昭和丁卯の四月余乏を司農に承くるに當り、詞友丸田君尙一郎此の軸を貽りて賀意を表示せらる。顧ふに湛若は不羈縦恣の人にして、亦慨世憂國の士なり。詩書學問の傍、深く風雅の三昧に悟入せり。其の卷を失ひて縊らんごし、死に臨みて尙琴を彈するが如きは、奇行人を驚かすものと謂ふべし。丸田君此の幅を將て余に贈れるは蓋し或は寓意の存するものあるに非ざる歟。吳錫麒が湛若の硯銘を咏せる一詩あり。翁方綱の爲に作れる所なり。偶々有正味齋集を閲して之を得たり。穀人覃溪の諸老すら景慕せること斯くの如きを見て、倍々其の筆墨の輕んずべからざるを感じ。因て左に録す。

題鄭湛若硯銘并洗硯池字拓本

硯側鐫天風吹夜泉五字、下有明福洞主印、今藏王蘭泉廷尉處、洗硯池在粵東光孝寺、翁

覃溪學士使粵、拓其字以歸、與銘合裝成軸、索題、

君詩乃在瀟湘洞庭間。美人老去凋蘭顏。乞歸一勺楚江水。手洗芙蓉不肯閒。

此硯從君共往還。此地流水日潺湲。海南遺字剩風雨。太息畸人閱歷難。

高莫高於鴉昨山。遠莫遠於鬼門關。天令絕域顯文字。銅柱手剔苔花斑。

壺笙蘆管盡收拾。記成赤雅誰能刪。藍胡二月歌羣蠻。鞞娘妙舞搖花鬢。

鸚之鴿之雙活眼。見君手畫蛾眉灣。歸來抱琴死忠義。片石寂寞留人寰。

招君魂兮渺渺。石有淚兮潛潛。雲車霧駕安能攀。天風颯颯夜泉起。明福洞邊聞珮環。

何蛟騰尺牘小軸

紙本

明の武英殿大學士太子太保何蛟騰は字を雲從と云ふ。貴州黎平衛の人にして、天啓辛酉の擧人なり。其の忠節殉難の事蹟は、炳乎として青史を照らし、黃道周、倪元璐、史可法、瞿式耜等の諸公と俱に明末掉尾の大人物なれども、其の筆墨は殆ど絶無にして、著録亦之を傳ふるものあるなし。余三十年來搜求して、獲たる所唯此の一尺牘のみ。

崔子忠荷湖泛舟圖立軸

高四尺八寸

闊一尺二寸五分

絹本

淡著色畫。幅の中段に扁舟を畫き、觀荷の一客を載す、小童茶を煎じ、舟子棹を操る。指頭大の青綠點を無數に散布し、臙脂の小點を以て其の間を點綴し、以て花葉の意を顯はせり。其の荷たり、菱たり、蘋たるは知るに由なきも、滿池都て是れ水草、涼氣人の肌を襲ふ。一の水紋、一の石坡を畫かず。唯是れ水天空濶、十里一望のみ。圖局の超凡にして手法の放膽なること、吾齋の圖畫中未だ之に比すべきものなし。圖中の人物亦高逸奇古を極む。幅の上方右側に行書にて「崔子忠」と款し、下に一印を鈐せるも印文模糊として辨じ難し。詩塘に石濤の題詩あり。曰はく

水光飄泊與天浮。一任孤舟自在遊。利鎖名韁拴不得。相知唯許海中鷗。

時辛未春夜清湘石濤題崔開予畫

石濤の自畫自贊の題詞は毎に見る所なるも、人の畫に詩を題せし如きは幾と希なり。今此の圖を觀、此の詩を讀むに及び、人をして浩蕩汪洋、塵外の境に遊ばしむ。

子忠は尤も人物に工にして、其の寫す所、皆面目奇古、點染傳彩亦迴に尋常作家と同じからず。同時の陳洪綬と其の名を齊ふし、南陳北崔の稱ありき。朱竹垞曰はく「予少時、洪綬の畫を得て輒ち驚喜せしが、子忠が作れる所を觀るに及び、其の人物の怪偉なること略同じく、

二子の癖も亦相似たるを知れり。崇禎の末、京師に南陳北崔の號ありしは故ある哉。二子の如きは孔子の所謂狂簡なる者に非らざるか。唯洪綬の畫は今日尙流傳少からざるも、子忠の眞蹟は極めて稀なり。近世の著録を閱するに、僅に穰梨館過眼續錄に「崔子忠紫荊篤愛圖軸」を載せ、書畫鑑影に「崔子忠仕女軸」を録せる外には絶えて見る所なし。余曾て上海出版の畫冊中に崔子忠の宮女圖を載せたるを見しが、纖細の庸筆界畫に類し顧雲臣、仇十洲に似て非なるものにして、所謂奇古怪偉の筆致は之を見るに由なかりき。今尙其の贗鼎にあらざるやを疑へり。

胡會恩書七言絕句立軸

高四尺七寸一分 闊一尺四寸二分 綾本

行書。詩に云はく

雨餘蒼翠轉霏微。杜若州前釣艇歸。久爲故人臨野閣。江雲入暮濕秋衣。

「胡會恩」と款し、下に胡印會恩、南苜の二印、右方上に御題秘閣の一印を鈐せり。

胡會恩は大儒胡渭の從子にして、亦一代文學の大宗たり。康熙の進士にして字を孟綸、號を

苔山と云ひ、官は刑部侍郎に至る。其の名は今尙嘖嘖たるも、其の筆蹟は極めて稀なり。豈珍重せざるべけんや。

楊文驄書五言絕句立軸

高五尺七寸

闊一尺三寸六分

紙本

行草書。五言絕句一首

匹練九天落。飛珠滿洞門。仙津不可問。人世隔花原。

「楊文驄」款を署して下に文驄之印、楊氏龍友の二印、右方上に輕順閣の一印を鈐せり。

吳梅村は嘗て龍友が無補居士の爲めに畫ける墨蘭に題して「沅湘萎落痛當門。舊迹惟遺畫卷存。曾作國香猶彷彿。同心白首哭陳根」と云へり。蓋し梅村は明朝の覆没に當り、新朝に仕へて二臣の汚辱に甘んずること錢謙益、龔鼎孳の如くならざりしも、而も亦身を以て社稷に殉するここ龍友の如くなる能はず、衷心怏怏たりし情緒は、其の詩詞に依りて隨處發露せるを見る。若し梅村をして龍友の此の軸を見しめば、恐らくは流汗背に溢るゝの思ひに堪へざりしならん。

楊文驄山水長卷

高一尺三分

長十八尺八寸五分

金箋本

墨畫。布景奇拔、運筆暢舒。眞に龍友の傑作なり。末に「崇禎戊辰夏日、爲石田仁兄、畫於長安客舍、時余將南行、石田展卷、如見楊生也、友弟楊文驄」款識し、龍友氏、楊印文驄の二印を鈐せり。戊辰は崇禎元年なり、此の卷は即ち龍友三十二歳の作なり、石田は沈石田にあらざるは論無きも、其の何人なりやを詳にせず。藏印數方あり、中に阮元印の一印あり、即ち曾て文選樓の收藏たりしを知る。

龍友の畫は董思翁を學べども、必ずしも師法に拘拘たらず。思翁之を評して「宋人の骨力ありて其の結習を去り、元人の風雅ありて其の佻癡なく、巨然惠崇の間に出入せり」と云へり。又嘗て其の山水に題して云はく「別一山川眼更明。幽居端的稱高情。從來老筆荆關意。施粉施朱笑後生」と、推許の至見るべきなり。

龍友の山水は、文政の間、初めて吾が邦に舶齎し、美濃某家の收藏に歸せり。梅崖嘗て之を携へて京都に到り、山陽倒屣して之を迎へてより以來、美濃の楊文驄と稱して其の名頗る高く、

數年前竟に數萬金を以て大坂の某君の獲る所となれり。而も其の畫は今日の鑒眼を以て見れば、遂に尋常應酬の作たるに過ぎず。精絶なること此の卷の如きにして、初めて楊畫の眞面目に接するを覺ゆ。清初の何無咎白は嘗て龍友の畫に題して曰はく「龍友天才壞異、而遊戲畫品亦自元詣入微、其運思之際、智識俱泯、運之以神、信腕而出、斐亶生動、似不從人間來、坡公云、我攜此石去、袖中有東海、使予奄有此幀、足詫河伯而王百谷矣」と。龍友の畫、當時既に珍惜せられしこと斯の如し、余幸にして此の大作を獲たり、乃ち此の一卷亦これ坡公袖中の石なり。以て天下の海岳を嘲るに足らん。

楊文驄栖霞遊記卷

高九寸八分

長十七尺六寸二分

紙本

草書。凡て一百五行、意に隨せて落筆し、神趣横溢せり、董文敏も、恐らくは常に斯の如くなる能はざるべし、歎識に云はく

秋夜與伯含坐譚、因話及中峯之游、伯含磨墨拂紙、命余書記、以歸、醉後亂抹、殊不成字、但記事頗眞、伯含歸而展玩時、若向七月十五夜氷輪下行也、友弟楊文驄又識。下に楊印文驄、龍

友の二印、右方上に補瞻齋の二印を鈐せり。即ち文は天啓七年丁卯、龍友三十一歳の時、諸友と中峯に遊べる記なり、此の卷は後に書せし所なれども、其の歳時を詳にせず。

吳梅村は畫中九友歌に龍友を咏じ云はく「阿龍北固持雙矛。披圖赤壁思曹劉。酒醉灑墨橫江樓。蒜山月落空悠悠」と、出でては矛を執り、入りては管を握り、文武を兼綜して適くとして可ならざる無きは是龍友の獨絶なり。其の大節を持して下らず、竟に社稷に殉せしに至りては、亦柔腸文人輩と日を同うして語るべからず、龍友筆墨の重きを後世に成す所以のものは、惟藝林の驍將たりしが故のみにあらざるなり。同時の馬瑤草士英は亦詩書畫に名ありしも、而も其の畫は人みな之を忌み、之を有する者は、偽りて妓女馮玉瑛の作と稱するに至れり。龍友の筆墨は人争ひて之を寶とし、殘鱗片甲と雖も獲るに重價を惜まず、洵に正邪の分、素るべからざるものあるを見るべし。

蔡道憲漁家咏立軸

高五尺六寸二分

闊一尺五寸二分

絹本

草書、五言律詩一首。云はく

家在長江裡。煙波何處村。撥花垂細餌。剪竹結斜門。臥去月千頃。沽來酒一尊。
逢人埋姓字。恐有哀王孫。

「漁家詠、蔡道憲」と款し蔡印道憲の一印を鈐せり。

字は肥厚遒勁、頗る焦澹園竑の筆法に類たり。此の軸は市河米庵の舊物にして載せて小山林堂圖録にあり。

蔡道憲は字を元白と云ひ江門と號す、萬曆四十二年乙卯に生まれ崇禎十年丁丑、進士に第し、崇禎十六年癸未、賊難に殉せり。享年僅に三十九。其の齡を以てすれば翰墨の專家と雖も、技未だ大に顯はるゝを得ざらむ、況んや江門は經國憂世の士にして、國步艱難の際に生まれ、未だ餘情を文墨に恣にするに違あらざりしをや。其の名の文苑に遍からず、其の蹟の流傳多からざるは蓋し已むを得ざるなり。今此の幅を見るに書法峭硬骨立、なほ江門か磔柱に倚りて賊兵を叱するの概あり。

靜志居詩話に云はく「江門自ら悔後集に序して云はく、悔後者何、前日妄作詩、今而後悔也、悔後而復有集者何、吾但能焚前日之詩、今日之作、且輯之、以俟後日之再悔也」と。其の虚懷見るべし。詩は音節未だ諧はざれど、而も清婉越俗なり。移竹已抽三尺筍。種桃爭發一庭花の如

き、また湘水清紫藤。花落魚子生の如き、皆佳句たるを失はず」と。今此の軸の詩を讀むに、竹垞の所謂清婉越俗の評頗る當れるを覺ゆ。

楊恩壽の眼福篇に「蔡忠烈公墨蹟立幅跋」を載す、其の一節に云はく

家居の時。清明に値ふ毎に、嘗て碧湘門を出でて、忠烈公衣冠の墓を拜し、敬んで純廟御製の詩碣を讀み、太息歎歎に禁へず。忠烈の凶醜に慘遭せしを悲み、而して又天語褒嘉を得て、其の姓名をして瞿忠宣、何忠誠と同じく不朽ならしむるを得たるを幸とせり。唯其の字傳らず、湘中未だ其の書を能くせしを知る者あらず。今忽ち此の巨軸を得たり。一再展玩するに、筆力排纂にして庸沓姿媚の弊なし。人品の卓卓たる、忠烈の如きにあらずと雖も、字として亦傳ふるに足る。何ぞ況や忠烈の作たるに於いてをや。

此の一跋は宛も吾齋の此の軸の爲に言へるが如し。

蕭雲從秋山訪友圖立軸

高五尺八分

闊二尺一寸六分

絹本

淡著色畫。細筆を以て秋山を寫せり。山は牛毛皴を用ゐ、樹は虬龍の如し。乃ち黃鶴山樵の法

を傲ひたるなり。功力を費せること甚だ大にして工雅絶倫、習見する所の清疎淡簡のものに類せず。洵に尺木の大作なり。款題に云はく

松風嘜嘜水潺潺。拽杖閑行意坦然。應訪石橋東畔去。友人茅屋竹林邊。

傲黃鶴山樵筆、作秋山訪友圖、時崇禎壬午年七月、蕭雲從。

蕭印雲從、尺木の二印を鈐せり、又金谷雲生の一印あり、

尺木は萬曆二十四年に生まれ、康熙十二年、七十八歳を以て歿せり、款の壬午は崇禎十五年にして、即ち尺木の四十七歳に當る。

尺木の山水は古人を追摹し、衆法を兼綜し、自ら一家を成せり。故に其の畫は簡疎のものに雖も、自ら尋常作家と同ならず。特に經意の作、此の軸の如きに在りては逸韻功力、兼備はり、推して大家と爲さざるを得ざるなり。

蕭雲從夏山高隱圖立軸

高四尺四寸

闊一尺六寸八分

紙本

墨畫。用筆沈着、墨采重厚、見ること久ふして妙趣漸く饒し、丙戌立秋日、無悶道人寫、款識

し蕭雲從の一印を鈐せり、又會心所不在遠の一印あり、丙戌は順治三年にして、尺木五十一歳なり。

馬士英渡江達磨立軸

高一尺九寸

闊八寸八分

紙本

朱衣の達磨、蘆葉を踏みて立てり。眉目鬚髯は細筆を以て描き、風貌超俗、一見して庸史の作ならざるを知る、款無し右下方に馬印士英の一印を鈐せり。

馬士英は瑤草と號し、書畫俱に之を能くせり、而も奸臣たりしの故を以て、人その筆墨を藏するを愧ぢ、偽りて妓女馮玉英の作と爲せりと云ふ。千歳の下、曲直の相紛交すべからざる斯の如し、懼れざるべけんや。然れども退きて思ふに、君子は罪を惡みて人を惡まず、乃ち亦人を以て藝を没すべからず、世道人心に益する所無しと雖も、墨苑に一席を與ふるは必ずしも不可ならざるべし。

邵彌東南名勝圖冊

文震孟對題

高八寸

闊四寸五分

紙本 計八頁

著色畫。西湖、雁山、金山、張公洞、玉潭、善權寺、周將軍祠、虎丘八勝の實景なり。每幅邵彌之印、字僧彌の二印又は一印を鈐せり。第八幅に隸書にて「丙子夏五、瓜疇邵彌戲筆」云云識し、彌、字僧彌の二印を鈐せり。每幅文震孟の對題あり。丙子は崇禎九年なり。

瓜疇は吳梅村の畫中九友の一人なり。性情孤癖にして俗に諧はず。梅村之を詠じて「一生迂癖爲人尤。僮僕竊罵妻孥愁。瘦如黃鶴閒如鷗。煙驅墨染何曾休」云云へり。其の人既に斯の如し。故に其の畫ける所亦清瘦枯寂にして一毫の匠氣無し。その師法をせし所は荆關に在り云へども、高く繩墨の外に超脱して自ら閑逸の致を極めたり。其の倫を前代に索むれば、倪雲林之に近し。但雲林は蕭疎にして瓜疇は繁細なり。而も枯淡の一味は則ち相同じ。梅村九友の中、崇禎甲申の國變後、尙生存せし者は王時敏、王鑑、張學曾、邵彌四人のみ。而して張邵兩家の筆墨は、二王に比して更に罕なり。文震孟の對題は亦奇きすべし。之を左に録す

西湖

西湖風景無窮。獨昭慶前放棹湖心。而寶叔換堤雷峯靜寺。舉目盡供奇勝。

雁山

雁山以峯挿天表勝。大龍湫又以瀑布勝。瀑落懸崖、日出時如五色雲映帶、常依聲而怒噴、開者不止千丈。

金山

金山一柱特立江心、而朱提佛閣與石色風濤相映、郭墓如筆架橫前、覽者奪目。

張公洞

張公石洞、相傳開自赤烏二年、淵邃無底止、中列怪狀奇形、曲摹難盡。

玉潭

潭深萬丈、而石山翡翠覆其上、色碧花香、朱廊曲舍、遊人徃徃徘徊不倦、日玉潭者、謂有玉僊勝蹟也。

善權寺

天書倒篆、惟善權寺有焉、其寶殿高奇、當非人工所構、離寺里許、石洞兩層中、一有泉流不斷。

周將軍祠

周將軍昔斬蛟於古長橋下、而萬戶寧、故祠於邑之東南、至今高壠茂林環映左右、宛然有城市

CL.
NO. 41179

山林之趣。博覽然自得。而後曰。此誠佳也。夫山林之趣。在於心。不在於形。若徒慕其形。而不知其心。則山林之趣。亦將何有乎。

虎丘

吳門遊舫、晝夜連絡不輟者虎丘也。其山甚小而千人座為最趣生。公於此說法、頑石皆點。

竹塢文震孟

澄懷堂書畫目錄卷四

文藻不五子友。亦有之。之在左に録す。
五、張公之賦、由對開自赤島。平、騰蓋兼道。其中心。良對無奇。以曲。琴無盡。前代に。素む。以。其。林之。地。公。師。書。或。は。蕭。疎。に。し。て。瓜。等。に。懸。細。を。而。も。結。淡。の。一。味。は。則。ち。相。同。じ。梅。村。九。友。の。金山。三。株。樹。と。五。島。而。未。對。對。開。其。心。風。雲。自。勉。醇。茶。或。琴。樂。清。澹。觀。各。奪。目。而。して。張。師。前。家。の。筆。畫。は。山。王。に。比。して。更。じ。平。なり。
文。藻。不。五。子。友。は。亦。奇。と。し。之。を。左。に。録。す。

新書...日出...正...常...

